

川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十三年十一月二十五日 印刷
昭和四十三年十二月一日発行 (毎月一日発行
(第三十九号))



No. 39

特集・語味の市

十二月号



えらばれ

みがきぬかれた 灘の酒

超特撰 日本盛



超特撰 (化粧ケース入)
一、ハリットル詰・一、四一〇円

酒 清
日本盛
ニホンサカリ

灘 西宮酒造 醸



国立公園 奥新和歌浦

・ 雑賀崎



国際観光旅館

う お ま た
魚又楼

風光明媚な
海岸美を
誇る

TEL 和歌山 (44) 0431・1186(代)
大阪案内所 (641) 3 5 6 4

罪の意識かけらも見せずダニで居る

うすれゆく人生 何をたくらむぞ

けちな意地見すかせまいのこざかしさ

足音を絨氈に吸わせホテル更け

十月三日小樽駅に佇つ
啄木の駅の駅に冬迫る

今月のことば

今年のオリンピックも終った。開催毎に更新される速さ、強さ、巧みさ等記録は全く文字通り人間わざではなく呆然たる外はないが、今年チェコの16才の少女が飛び込み台から美事な演技をみせたのにはしみじみ打たれた。仮りに牛若丸に走り高飛び、弁慶に重量挙げを注文したとすると、一応よしとやって見るだろう。しかしこの十米の高さから後向き二回半回転飛び込みをやって見ると言っても突壁には絶対に出来るわけではない。一方可

憐な少女はものの美事に金メダルだ。人間には天与の素質というものがある。その素質を正しく伸ばす上に練習「くりかえし」という努力がどの位威力を示すかをこの少女は私に見せ付けた。そしてスポーツの記録更新が個人の肉体的、年齢的限界に重大な関係を持つかという事も知らしめた。私達の文芸は無限に近くその制限から許容されるとも言える。私達の脳細胞は最後まで磨きを怠ってはならぬし、生命の続く限り磨きが効くものである

中島生々庵



川柳塔十二月号

川柳塔十二月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

今月のことばと句帖……………中島生々庵…(1)

川柳塔……………(同人作品)……………中島生々庵選…(4)

二つの流れ……………本田恵二朗…(2)

本年の回顧……………清水白柳…(22)

川柳初篇研究……………(六十六)……………(20)

前田喜代人・岡崎重義・清博美・藤井和雄

川端柳風・故高須亜三味・丸十府・岡田甫

秀句鑑賞……………後藤梅志…(30)

川柳徳川記……………(二)……………富士野鞍馬…(41)

手負……………い……………高鷺亜鈍…(43)

郭公と將軍……………(大陸巷談)……………東野大八…(44)

私論 柳論

『二つの流れ』

十二月はあわたたしいものとされているので、さしてあわたたしくない者までがあわたたしきようにする。事実あわたたしい者であっても過去一年を振り返ってみる位のゆとりが欲しいと思う。私は後者の方だが、夜長のひとときを電気炬燵に足を突込んで川柳界の一年を淡々と振り返ってみることにしている。

川柳の中が広がった、喜ばしい発展であると言っている内にその広がり振りが飛躍的となつて、この一年は遂に二つの流れが出来てしまった姿である。つまり本格の流れと革新の流れとが平行してその交るところが無い景色で、川柳地図を塗り換えねばならぬと思える位である。本格の流れは平泳ぎで泳いでいる。革新の流れは背泳ぎで泳いでいる。革新の流れは背泳ぎで泳いでいる。私は勿論本格の流れを泳いでいるつもりである。革新の流れを泳ぐ

諷詩「龍沙吟」……………	橘高薫風……………	(57)
語味の市……………	(同人特集)……………	(25)

戸田古方・吉田水車
金井文秋・不二田一三夫

近作柳樽……………	西尾栞選……………	(32)
-----------	-----------	------

雅号ぶっちゃけばなし……………	村田瓢太……………	(57)
-----------------	-----------	------

初步教室……………	菊沢小松園……………	(48)
-----------	------------	------

大萬川柳「不良」……………	清水白柳選……………	(50)
---------------	------------	------

★柳界展望……………	(薫風)……………	(52)
------------	-----------	------

★本社十一月句会……………	(庸佑)……………	(54)
---------------	-----------	------

★各地柳壇……………	(文秋)……………	(58)
------------	-----------	------

「美人」……………	北村三步選……………	(46)
-----------	------------	------

一路集「急ぎ足」……………	黄瀬美秋選……………	(46)
---------------	------------	------

「運」……………	小川静観堂選……………	(47)
----------	-------------	------

★編集後記……………	(二三夫)……………	(65)
------------	------------	------

のはやさし過ぎるからそこでは泳がない。なぜなれば一般社会の読者に判ってもらわなくてもよく、又十七音字でなくともよいからである。だから難解に作ることは手輕に苦もなく出来てしまうという論がある。私はこの論に抵抗が無いではないが、或る点まで賛成である。平易な言葉で味わい深い句をものすることのむつかしさと取り組む方が私の川柳人生は生きがいを感じるからである。革新側からは平易な言葉の句は安っぽく非文学的で手輕に苦もなく作れるから作らないと反論が出るに決っている。それはそれでよいので、それぞれ個性差があるのだから主観が違うのが当たり前である。つまり我が道を行けばよいのだ。二つの流れは別々に流れたらよい。それを一つに統合しようとする岸がくずれて洪水になったりする。柳誌も両系が別々にあってよいしそうならざるを得なくなるであろう。両方の流れを小器用に泳ぐ個性喪失作家が一番困りものだと思う私である。

(本田恵二朗)



中島生々庵選

大阪市 石倉旅風

河相すゝむ氏を悼む

「にしなり」が縁となりし君なりし

病妻の死（十月六日・南大阪病院）

帰りたい入院したい無理をきき

まだ温い壺抱かされて掌でかばう

地に還える一壺の灰は軽からず

もう薬要らぬところのひととなり

青森市 工藤甲吉

大学へやらない親に威張られる

秋刀魚にも貧しき者は逃げられる

目の前に悪が亡びるさわやかさ

泣くなどは無理弁慶も泣いたとこ

青森港に生々庵主幹夫妻を見送る

北へ行く船白白と秋の翳

山の辺の道

古代への道へ踏みこむ曼珠沙華

石仏二尊秋の扉のなかにあり

寺のかべ時雨れる白にできている

赤松のみごとな森が秋を吸う

ひとりの客へ本堂の扉あけ放ち

大阪市 正本水客

富田林市 川端東雲楼

一病息災その一病がまたねこみ

共稼きようは市場へ回る番

気をもませ乍ら勝手に仲直り

弱そうな金魚ことしも冬に入り

皆無事に帰りついたか渡り鳥

倉敷市 小幡里風

灯を消してかたぶくまでの月と飲み
吾が家にも冷戦があり妻無言

愛嬌へつい釣銭を置き忘れ

コスモスが大きく揺れたかくれんぼ
先着と云う一列へ妻と僕

大阪市 大坂形水

退つ引きのならぬ出番へ袴はく

シングルと廻ってゴルフ嫌になり

御堂筋良い運ちゃんに乗り合せ

デパートの売値探ぐってきた自信

商品を作る立場で見るサイケ

倉敷市 水粉千翁

挨拶もなしに停年来てしまい

はめ方もはかりにかけると姉妹

折り返しくよくよすなと貸してくれ

目の色でくらしを盗む里の母

灯を消せば月を乗せてる虫の声

高槻市 若柳潮花

緋鹿の子へ紙の吹雪の散る櫓

花道の七三のないう合せ

父の死を悼む

焼香へまだ泣きたらぬ眼をおさえ

極楽が見えたら他見せずに行こ
末の子に抱かれて遺骨帰って来

岡山市 服部十九平

百までを生きるプランの隠居部屋

橋渡しアフターサービスうるさすぎ

ピクニック気分も混るデモの列

金婚の年を忘れてハトポッポ

めおと茶碗こちらも夫婦の名で贈る

倉敷市 本田恵二郎

ご好意とあとで判ったあわてよう

残飯処理所ですママの胃袋

献眼をした目だウインクなどすまい

ビリをゆく肥満児あきらめ切っている

冷蔵庫すし詰にして待つところ

大阪市 本多柳志

労資双方理路井然とストに入り

値上げして値切って買えと云う政治

蒜山高原

牧牛の明日は別れる草を喰み

どっからでも写せと牛は起きて来ず

砂風呂のかじかへ洗う手をひかえ

大阪市 橘高薫風

草臥れがどっと仁王の大わらじ

スケートを履くと獣の姿勢とる
物云わぬ金魚がうれし誕生日

木枯しに赤い卍を抱く女

夜深く俯仰の百合を見て逢わず

大阪市 後藤梅志

明治百年に失いしもの得しもの
目に見ゆるものが紛れもなき日本

良きかな川端文学

孤し子の心にともるノーベル賞

神は目に見えず動脈 脈をうち

洗えば済むにハンカチをだす人がない

眼鏡二つかさねて辞書を離さない

大阪市 不二田一三夫

なに考えていたのかわが家通り越し

まだ恋の目でないことがもどかしく

貧乏も三度は食えるぜいたくさ

寄席(二句)

恵ぐまれたコンビ夫婦という強み

ベテランは客の程度を知っていた

大阪市 太田良子

いい場所にあるねと墓場値ぶみされ

再入院医者だけが知る退院日

背を向けて寝たものの待っている

うぬばれが視線をジッとつけとめる

鳥取市 藤本礎山

損をして売ったときようさん儲けはり

花缺年季の入った音が冴え

恋人もないからオールドミス潔し

別居中ですわと女さりげなく

熊本県 有働芳仙

空っぽの金庫の鍵を預けられ

子供さえいねば別れる本音なり

雲に乗る梯子はないか秋の空

見ちゃいやと言ってる望遠鏡の月

宇部市 平田実男

床柱辞退していた顔でなし

失礼も混ぜた祝辞へわく拍手

母親が安心するから通う塾

共稼ぎ金で済ませる癖がつき

出雲市 尼緑之助

故郷近し湖はかすんでまねくなり

湖の風一陣たりし嫁ヶ島

凹んだところが港よネオンの灯
ベタベタと貼って破れてすんだスト

高槻市 福田丁路

五十才以下と求人無情なり

親馬鹿を丸出しにした遺言状

お気輕にどうぞと云えど金がいり

世は移り埃りまみれの地藏尊

大阪市 山川阿茶

底見えて来てからあわてたり凡人

年とって淋しかろうに人ざらい

貧乏も中途半端で悟られず

十キロをやせるに食べ物高うつき

門真市 福島鉄児

世帯じみかけてがらくたふえ初め

七転び八起きは果ない夢でした

いっそ離婚したろと思う日もあれど

気の弱い男は歩くだけの恋

大阪市 木村水洞

高座から世渡りのコツ教えられ

軍歌をたのしく聞けるほど平和

下戸は下戸なりに娛しい紅葉狩

主流派も反主流派もない長屋

大阪市 金井文秋

親に輪をかけたしまり屋ビルを建て

タレントへの夢を母親持ちつつけ

死ぬ時がわからないから貯めつつけ

結局は家業を継いだ回り道

笠岡市 木山遠二

抛っても蹴っても鈴は笑うなり

日日好日持病の手当怠らず

老の日記おんなじような日が続き

自信とてなし執念があるばかり

東大阪市 久米奈良子

さりげなくことは交して野望抱く

熱帯魚秋の思索か動かない

糸切り歯老母健やかに針仕事

掌のうちを見せて覚悟を迫られる

京都市 都倉求女

太陽も一日終えた色で落ち

兵児帯を結んで帰宅の顔になり

秋の陽へ蜥蜴もサイケの美に光る

秋風はあわれと勝手に人が決め

倉敷市 野田素身郎

冗談にしときましようとな逃げ
日記にも書けず四十歳の恋
運動会ストする先生にはみえず
左遷の地蝶ネクタイが目立ちすぎ

奈良県 草深醉升

ふんふんと聞いてて急所おさえる気
物価高そしらぬ顔でゴルフ族
災難と昔は言うた事故しきり
名月へ庭ひとめぐりして飲みなおし

ハワイ 羽佐間柳葉

絵葉書に土地の訛も書き添えて
当てにせぬ易者の言葉が気にかかり
無い金と思つて飲んだだけか穴
教養も揚底なのか鼻にかけ

鳥取市 森本法泉水

結論を出したは黙っておった人
母屋より車庫が大きい家に住み
気前よく払えば集金朝から来
横断の注意してから子と分れ

大阪市 西田柳宏子

信州路の旅にて(二句)

ローカルのサービス名所へ徐行する
駅弁にみる山の幸海の幸
路郎忌へ不肖の弟子の勢揃い
停年へ最後のフアイトかきたてる

岡山県 浜田久米雄

陶然と酔えば家中寝てしまい
みんなまで言わせずわかつとるわかつとる
ぜいたくは言うな晩酌あてがわれ
秋祭いつもたべてるものをたべ

香川県 三井醉夢

守銭奴になればこの恋けりがつく
つきまとう犬よお前も淋しいか
刈りこめば庭は冷たいかおである
心まで売らないと云うアイシャード

竹原市 山内静水

佐渡へ来て音痴も唄う佐渡おけさ
運ちゃんがおけさ唄うも佐渡ヶ島
加賀に来て千代女を偲ぶ掌を合わせ
スリッパもマイクも要らぬ永平寺

島根県 藤井明朗

凡人もよし凡人の暮しむき

よし不満あつてもこの場笑みを見せ
家計簿見て下さいと晩酌前に出し
この辺で打切りますと冬仕度

藤井寺市 西 いわを

装うて異性に飢えてゐる惨め
三度目のくさめは咽喉の奥で止む
病床へ抵抗もなく年暮るる
傾むいてなにか叫んでゐる並木

京都市 大 鶴 喜 由

貸し借りが貸し借りでない好き同士
責められて女ですもの嘘も云う
成程お説の通りさりながら
留守でない留守を感じる電話口

高槻市 傍 島 静 馬

退くことを知らぬ何かが欠けている
コスモスよ台風わきへ外れたそな
待ったなし云わねばよかった王手飛車
株やめたはずが氣をもむ上相場

大阪市 吉 岡 美 房

内職へ豆ふつふつと煮える音
美人だから過去も未来も覗かせず

あの刑事ならば話すと惚れられる
差し入れに女の妬心ぶつかり

大阪市 西 出 一 栄

早すぎる秋へ木の葉の正直な
無造作に咲いた小菊にある魅力
無器用なわたしに殺生な松葉杖
ギブスから自分の足を取り戻し

宝塚市 小 畠 無 聖

両輪の片っぽなくて世の重み
慰めのそのひとしづく抱きしめ
押してきた乳房に皮膚がおどろいた
誘われて誘って若さためらわず

名古屋市 吉 田 水 車

扇風機ひんやりとして仕舞われる
たばこやの娘斜めにすわるなり
文明のルツボへ急ぐ朝の列
人間は守るに弱し栗のイガ

松江市 中 川 晃 男

雨洩りを受けるバケツにあるリズム
お月様と走りくらべの帰り路
生きてゆく朝のラッシュに巻き込まれ

税務署も僕も生きてゆかねばならぬ

奈良市 宮口 笛生

いいかつこ途端に交通違反なり

とことんまでのまされ男はつとかれ

お帰りへ妓は舌を出しに出る

兎住む月にしておくすき立て

大阪市 室谷 鉄舟

冷房の中でマネキン秋を着る

長靴の中で水虫動き出し

魅力ない妻となったが使いよい

見えて居て釣れぬ魚と根比べ

豊中市 寺田 花宵

秋になお咲いて可笑しい夏の花

呼びつけておいて病人ただ眠り

見舞客隣の人も見舞いけり

入院を代ってみたい日のつかれ

倉吉市 奥谷 弘朗

あの人はいい人だったと言われたし

愚かさ気づく遠慮を笑い合い

気まぐれが歩こう会に顔を出し

ビールでも駄目かと医者にくいさがり

老残のささやき

倉敷市 木村 千容

とまどいつあきれかえりつおくる日々

子供だましみたいな言葉うれしがり

借景のこの窓今日も見飽かざり

手伝さん食事の店を開く

ひとずきのするかみさんで味自慢

大阪市 福井 野迷路

お人よし又もすつかり丸められ

人生を深めたらしいその涙

今日も又忘れものして帰らんか

大学が火中の栗はそのまんま

京都市 松川 杜的

「信州旅行」に詠む

午前一時きしめんの味も旅のもの

小海線車窓

線々をコスモスに埋めて小海線

小諸懐古園にて（二句）

雷電の手型へ吾が手重ねて見

蕉翁の心もかくやと宿の雨

松原市 谷垣 史好

大胆になるきっかけの腕を組み

ええかつこ云うなともうひとりの僕
腑甲斐ない男の二重験かな

スクラップブック セックスの項もあり

笠岡市 松本忠三

一階へ降り日本式で用を足し

ご馳走を跨ぎ十八番の芸を見せ

闘病の友が和服で社をたずね

新米のガイドへ運転士が助言

堺市 新谷笑痴

花宵氏天位二度獲得

近鉄へ二度もカップを乗せた女ひと

糸屑を取ってあげたを疑ぐられ

銀行に勤めてかたい人にされ

丁寧な言葉になってトゲが生え

鳥取県 森田布堂

掃きだめを豆の命がぐぐり抜け

枯れてなおヘチマの筋はぶらさがり

酒癖も継いでおやしに反抗し

遺骨まだ還らず老母田を守り

ホノルル 加川カロ

バスを待つ人様々のポーズにて

笑う日もあろうとかるく肩をうち

笑うだけ笑ってもとの顔になり

ぼつぼつと習って覚えて又忘れ

和歌山市 垂井葵水

改めて姉を泣かせに來た叙勲

クラス会やっぱり俺は遅れとる

としよりの出る幕すこしあけておく

雨やどりした表札に目で詫びる

岡山県 田村藤波

進歩した科学を台風あざわらい

天気晴朗老妻不帰の旅にたち

曳かれ者の小唄一人がよいと言う

大阪府 早川清生

秋は哲学 みの虫は養の中

大学で〇×式に世を批判

秋の大和路近道を教えられ

豊中市 戸田古方

雑草の戸籍をきけば外国種

窮極は何考える「無」と「空」と

そんな早寝と知らず掛けてきた電話

下関市 国弘半休

釣って来る日もあり妻の手弁当

餌代は釣つてとつたとコップ酒
奥様の手前は今日もびくをさげ

大阪市 河村 瑞川

三十三カ所妻を慕うた老の旅

那智山にて

御滝の裏に幽かな妻の影

紀三井寺

三宝柑老の土産に重たすぎ

室戸市 奴田 原紅雨

北風が来てまた裏の木を削る

あるときは金も要らぬと思いつめ

ええ歳をまた叱られる二日酔い

岡山県 直原 七面山

美しき雨 美しき女ひと通る

欲情の海で抜手を切る女

目に芳しき 竹の青

守口市 村田 瓢太

飛行雲秋晴れの空まっ二つ

代読の祝辞がつづき腹が減り

有金が気になり酒の味が落ち

和歌山市 西尾 公作

マージャンの疲れ旅から持ち帰り
観光バスマイクぼつぼつ酔い初め
まだ生きるつもり胃カメラぐつと呑み

小松市 馬場 魚山

台風へ菊は廊下に難をさけ

慈愛の眼よちよち歩きに行く所

秋刀魚へ大根の値を考える

姫路市 隠岐 不酔

鈴虫を大事に飼ったがめすだった

犬猫は借金もせずに楽に喰い

綴方小使ほしさに祖父をほめ

桜井市 岩本 雀踊子

他人様の噂に寄ってくる女

ねそべった女よっぽどひまと見え

万年も生きる亀さんさびしかる

平田市 久家 代仕男

滝音にひしゃがれそうなこもり堂

僧黙黙ゆさぶる滝の音に座し

雨の宿渡り廊下は手毬唄

大阪市 中川 滋雀

彦根竜潭寺

三成も見た名月を竜潭寺

京都真珠庵

借景の垣間見ごしにビルの窓

咲いてみて野菊は只の花と知り

枚方市 宮川 珠笑

恨みあい場所まちがえた待ちぼうけ

部下がもう察知している家庭不和

ほろにがく友の栄転祝う酒

竹原市 小島 蘭幸

試験勉強する妹へ早く寝る

満員車また美しい瞳と出合い

なにもかもわかった時は死んでいた

善通寺市 岩田 ひさお

不漁なら不漁のくらし網を編む

子の鼻でたしかめるプロパンの漏れ

家計簿に昇給額が見当らず

岡山県 横山 一声

晩酌に相手が出来て手があがり

目標があるから今日も精が出る

もう十年たてばと妻と語りあい

松江市 舟木 与根一

妻の座が安定したいびきなり

はっとさせ超ミニ足をうまく組み

中風の手に権利書まだ握り

高石市 谷沢 好祐

生命がけ蚊は生きる為吸いに来る

お位牌の父がくしゃみをする話

お隣りが部長になろうとなるまいと

鹿児島市 土岐 トク子

波しぶき突き切り就職第一号

一べつもくれずに嫁は奥へゆき

病弱の母夕べにほんのり薄化粧

愛媛県 村上 旭童

曼珠沙華ダンブへ首を振りつづけ

頼母子の中の一人に夜逃げされ

秋の夜もすぐふけるもの祭酒

鳥取県 清水 一保

縁有って夫婦喧嘩もできる仲

伸び切ったとて朝顔のつるも秋

人類の知恵を見守るお月様

鳥取県 河村 日満

会長の一周忌を迎えて(二句)

ほめ言葉ばかり仏もうれしかろ
蓮の座のせめては風の便りでも
新築のここもトマトや茄子の庭

松江市 柳 楽 鶴 丸

青春の思い出それは歪んでいた
病床でフト蒸発を考える
高見山日本の国技をかきまわし

岡山県 大森 娛 句 楽

庭掃除吹き戻されて蹴られる
祭り酒飲ませ運転拒まれる

義弟交通事故死
ひらめきや悪い予感に訃報が来

大阪市 河 井 庸 佑

結局はうちの子見に来た参観日
反省の色が見えぬとまたおこり
叱られておぼえた遊戯見てもらい

大阪市 今 西 章 雅

人間に穴あけそんなコンピュター
玉入れの下手なバママ運動会
二次会の酒にいさかい虚勢され

出雲市 野 村 岬 月

忙しく過ぎた月日を感謝する
しあわせは食えて丈夫な日が過ぎる
留守番は日向ボッコで老い給い

東京都 大 山 雅 城

三日履いてようやく靴に足合わす
雨もよし雨に文句を言うなかれ
この駅いつもライスカレーの匂い

笠岡市 出 原 真 奇

倒産の噂の中で建つ工場
何時までも長命出来そうコマーシャル
日日好日テレビに守をしてもらい

兵庫県 遠 山 可 住

アルバムの少女と妻を見くらべる
腹減った蜘蛛秋風にゆれたまま
そこへ来た冬も知らずに鳴きつづけ

堺市 青 野 遊 仙

信心と云い訳をして旅に出る
物作る苦しみを知る職に生き
くつろぎは三本立でする昼寝

芦屋市 丸 川 初 甫

満員のロビーに映えぬ一張羅

生甲斐をコップの底の泡に見る

新歌舞伎座「英執着獅子」

艶麗な女形素足を白う塗り

大阪市 天正千梢

つぎはぎの暮しも胸に赤い羽根

背をむけて寝ても信じ合える仲

其のあとはOKらしいねだりよう

岡山県 藤原秋月

三面は理性を捨てた記事ばかり

ジャンパーで来たのに座敷へ通される

十二月毎年同じ愚痴が出る

出雲市 原独仙

食欲の秋というのを胃に悩み

釣れた日は汚して来ても愚痴らない

有り余る米だと雀友を呼ぶ

奈良市 村上春巳

秋の草こんなところにある空地

体操を試みる歳になっている

雨宿り鹿も付き合いて呉れる

今治市 越智一水

せかされた内職親も子もつかい

父の墓父を知らない子が洗い
どん底のくらしでこわいものがなく

下関市 桜川不水

おしゃべりの腰を折らない機をはかり

湯豆腐へタイミングよい丹前着

盃をつなぐタバコの灰が落ち

大阪市 川口弘生

ザクロとはこんな味かと町育ち

売言葉へ買言葉してまだ怒り

不幸者塞参りして蛟に食われ

大阪市 宮尾あいき

すがりつくくせに朝顔派手に咲き

雑草も花壇の中で花を付け

台風にも耐えて雑草引き抜かれ

神戸市 仲どんたく

BGと社長スケジュール一ぱい

阿波踊りの手でゴーゴーを間にあわせ

こんな席にまで知事さんは相努め

伊丹市 小川静観堂

再起のぞめぬ妻と曾遊黒部の映像

寝ころべば孫メが枕かかえ来る

羊羹が入歯にくっつき明るい茶室

東大阪市 本多清人

特権のように満員へ子供連れ

世の中を反則なしとはしんどいな

役付きは名だけクレーム処理係

小平市 石居高志

失恋へ気にするなどは何のこと

もう少し出せと幹事の目がしらせ

日大事件

留年へ父兄の方が慌て出し

米子市 石坂新雪

そう言えばこのとこ見えんのが停年

悩ぶみした女へ煙草深う吹き

老人の日

老人がほめそうな世辞出てしまい

守口市 羽原静歩

淡雪のように年金消えてゆき

値切られて又値切られた植木なり

明日ありて明日なき群れの中にいる

岡山市 木山要次

踊らずに居れぬ若さがあり余り

夜の空想理性も恥もすててみる
ひとさまに触れる話題の座を外し

八尾市 高杉鬼遊

人類の太古もやはり石を投げ

物くれる友徒然草は善しと言う

創造の神に善い出来悪い出来

ハワイ 上田紅溪

素晴らしい着想メモを置き忘れ

釣れるとは聞くが隙なし年も寄り

子等が皆かたづくまでは元氣出し

富田林市 岩田美代

宿命に取り囲まれてあきらめる

手渡しの手紙はせっぱつまってる

むずかしい理論ガタガタ歯の痛み

岡山市 池田古心

常連の一人が休んだ日の話題

気短かが削れば鉛筆芯が折れ

おだてると酒を買うから招いとき

泉大津市 高津徹也

母一人残し家を出る

母に詫び再起ある身を誓いたし

考えた末の決意よ秋寒し

母強ししっかりやれと涙せず

倉敷市 井上 旭 峯

満員のバスに個性もなく揺られ

大物になってそれから低姿勢

生きぬいたあの厳尊い過去を持ち

大阪市 宮地 双 楽

野心なきああ我が余生なごやかさ

根性の差が勝敗の鍵にぎり

一儲けどころか虎の子蒸発し

泉佐野市 大工 陸 夫

新米は招くし古米は泣き付くし

老け切らぬ夫婦で味のある旅路

筈なれして掃除機を敬遠し

大阪市 西川 誓 二

札束にプライドもなく頭下げ

洲本城趾

洲本城脚下に絃歌さんぞめき

鳴門渦潮

渦潮が淡路と阿波の国境

和歌山市 野村 太 茂 津

身構えて待ち台風に嫌われる

機構改革部下のない係長

待ち呆け楽し山の秋を褒め

兵庫県 大江 秋 月

工場誘致したが川魚みんな去り

実力行使などと教師も勇ましい

松江市 岡崎 祥 月

妻と歩調合わせ銀婚式も無事

ほんとうにうまいと朝のお茶をのみ

大阪市 酒田 清 子

姉交通事故に会う(二句)

姉の事故又喘息があともどり

長斗病ドイツ語三つ知っただけ

熊本市 楠田 英 子

花の夢抱き球根そっと植え

食堂の隣の料理旨く見え

大阪市 水谷 竹 荘

兄弟がいたわりあって古稀を過ぎ

鈴の音さして帰るも先斗町

兵庫県 河原 みの る

値上げ値上げ消費の美德もおこり出し

舞台では主役いじめる役がつき

岡山市 江 国 幽 谷

玄関の趣味セールスとして見抜き

栗の皮猿にむき方教えられ

愛媛県 渡 辺 曉 童

見る人にまかせ四季咲き四季に咲く

教育長十五年半退職

台本通りのひっこみがこの始末

豊中市 和 田 一 乃 字

もう舌がもつれる酒にさからわず

父母の待つ駅あと三つあと二つ

八代市 永 松 道 雄

下知を待つ魚群見つけた船静か

頭から相手にされぬ無精髪

加賀市 細 呂 木 魯 木

公害のうつぶん吾が家もさんま焼き

待合所子を叱る親の様々な

大阪市 本 庄 金 三

日程表見つめ小切手書く店主

市場籠一廻りして付く思案

高槻市 山 田 季 賛

酔うているふりして上手にたかりはり
まち呆けも有って恋の又楽し

岸和田市 葛 城 伊 三 郎

母に背を向けた今宵の寝苦しさ

松茸を見付けた声は天へ抜け

和歌山市 土 谷 城 石

パチンコのマイクで戻るお医者さん

外したら内の子になるサン格拉斯

堺 市 高 橋 千 万 子

まかれたと知らずうかつと思いきみ

金要らぬ事が分ってついて行き

★

若 本 多 久 志

念仏申し候えど娑婆がよく

治るといふ医者を念仏より信じ

我執一念レントゲンに写れかし

禁煙を医者人ごどのように言い

ダンヒルも捨てて禁煙への決意

菊 沢 小 松 園

飼われてる弱身文鳥手に止まり

酔うほどに大胆になる女の手

よい妻のおのをころすこと多く
忍従の身に秋の風鞭となり
気紛ぐれの手に花缺荒れ狂い

清 水 白 柳

米に手を触れることなく値を定める
負けぬ氣を出したが石に嘲笑われた
金槌のマジナイでよし釘を踏み
棟梁と呼んで板前棚のこと
禁煙の三日目という横に座し

川 村 好 郎

若い氣へ手網引かれていた病床
達者ならこそあれもこれも出来
梅里まだ呼びに来ぬらし床を上げ
病人もはがゆうなつて治りかけ

中島生々庵著

川 柳 講 座

路郎、三太郎、水府諸氏の名言などもあつめ、初心者用に執筆されたものである。

★郵券五十円封入の方へ一冊進呈。申込みは川柳塔社へ

整理上なるべく

ご利用ください

川柳塔柳箋

一冊65円・送料35円

タチカワペン



優雅な書き味

添削は句だけでない妻があり

西 尾 栗

友遠方より来たる保険なり

蚯蚓も神さんもとなえて放尿草紅葉

義理の通夜珠数をよみ人をよみ

天高しペンに倦き人に倦き

破廉恥な氣持になった倉の中

北 川 春 巢

墓石の売り物彼岸の天王寺

亡き父母の墓より先きにマイホーム

幸福な犬は抱かれて医者へ行き

九州の物価帰省の子に尋ね

一浪の斗志を見たり十二月

川傍柳 初篇研究

(六十六)

前田 喜代人 川端 柳風
岡崎 重義 高須 啞三味
清 博美丸 十府
藤井 和雄 岡田 甫

526 手を握る所へぎんなん亭ツ落

單 弓

前田 手を握る方は浅黄裏。にぎられるのは既に出了た楊子見世の看板娘。おりしも浅草境内のぎんなんが落ちる劇的なシーン。面白い句。浅黄裏の風ボウが見えるよう。

銀なんが落ると楊子置いて立ち 二・八

あのいてふ何年程かと浅黄聞き

岡崎 贊。この手を握られた娘は、笠森稲荷のお仙と対照して、もてはやされた浅草の楊枝見世のお藤とするとおもしろい。見世のそばに銀杏の木があったので、銀杏娘と呼ばれた。

清 岡崎氏「お藤とすると面白い」といわれているが、これはお藤と断定してよからう。その見世は頼朝が捨てた箸から芽を出したといわれる二本の大銀杏の下にあったということである。笠森お仙との比較については「なんば笠森お仙でも銀杏娘にや叶やせぬ」という俗説も流行したとか。

藤井 此の句田園の素朴なラブシーンとして好きな句だと思っていたら「ぎんなんが落ちると楊枝置いてたち」の例句を示されては、正直のところがかかりしてしまった高須 柳屋のお藤は銀杏娘で、それに通った浅黄裏の句が多い。

銀杏がさぞなろうのと浅黄裏

丸 諸説賛。柳屋お藤が春信の錦画でもてはやされたのは明治年間、本句の安永頃まではやそれ風がかおっていたものであろう。

岡田 同。

527 感応肝にめいじ百両とる也

單 弓

前田 感応は感応寺の略。谷中天王寺。富クジがあり、また門前には両ろは茶屋がありにぎわった。富クジで百両とったのを「感応肝にめいじ」とうまく表現している。

感応は信心により、その心が神仏に通じ、そのしるしがあることで「感応の月限もな」と平家物語にあることはよく知られて

いる。

岡崎 感応寺の富札を突き当てる——狂句川端 贊。富突講は、元禄五年五月愚弊があることで禁じられたが、古社改築修理等の費用を幕府の資財が乏しく、窮余の一策として享保年間に許可したのが感応寺の百両富である。札は一枚一分、札員千枚一の富百両である。

神明仏陀の冥感で百両 傍二・7

百両はふらついていてとこまらず 二・12

高須 此の句狂句じみているが、百両といえど大金で全く「肝に銘じた」ことであらう。そこで当時の百両は「富クジ」と「持参金」に要約され、百両の句は両方に多い富に当たったつもりでジセモツ面を持ち

傍二・9

丸 諸説賛。

岡田 同。狂句調であっても、この当時の句はまだ洒落ツ氣の方が強く、そういや味になっっていない。

前田「鈴なりは、果実が神楽の鈴の如く、木の枝に群り生っていること。きついとは、ひどい、おごい、すばらしい等の意があるが、遊女等が鈴なりに並んでいる張見世を素見物する。お色気のとばしのおごさをいっただけであらう。「きつい事」の結句のひびきがよい。

清「ケイベツの意が含まれている。

藤井「問題は「きつい」の解釈如何により句が生きるか死ぬかだ。広辞苑によると①ひどい、おびただしい ②きびしい、つらい ③強い、たけだけしい ④窮屈 ⑤是非そうであることを要する ⑥大変だ、驚くべきことだ ⑦えらい、すばらしい。すばらしい事だとなれば一番あつてと思うが、この時代の人が日常使用したか。浅学で知らないで、何ともいえない。高須「この「きつい」は「すばらしい」であらう。従って張見世を素見でなく、大尽遊びとみたい。

丸「鈴なり」は前の説の如く「きつい事」は高須説の如し（飲おかしで……きつい事）が、上五中七がはつきりしない。自説なし。

岡田「きつい」には藤井氏が挙げられたように数義があり、その場合によって解釈もちがってくる。ここでは「大変な事だ」「大したものだ」の意、傾城が鈴なりにな

っている所へ行くとは、吉原を一晚、千両で買ひしめたという伝説のある紀伊国屋文左エ門を詠んだ句。

529 観音様の脈をミてくたびれる

前田「観音は浅草観世音の略称。一寸八分の御本体で本尊を拝することはできない。また、観音は風の異称である。いずれにしても脈をみることは不可能であるからくたびれるのである。

岡崎「不詳。観音様とは張見世の女郎を見立てたもので、くたびれたのは素見物ではなからうか。

清「駄労解だが、この観音様は千手観音ではないか。つまり脈をみてくたびれるのは手の数が多からである。

藤井「虱説は不可能。異説として観音様のような生娘はもじもじで恥かしがつて脈一つ診させないで手こずった医者？ とにかく観音様の手は脈を診せる手つきではない。診察拒否の型だ。しかし、謡曲「田村」の千手観音の句に、観音の千の矢先に五百うそがあり、千手観音をただ観音といっているから清説が正しいだろう。

高須「川柳的に千手観音を詠んだもので、どの手の脈を見るというのでなく、全部の脈をとったのであらう。笑止々々。

丸・岡田「清説賛。」

530 遣手が表徳金笑とつける

岡崎「表徳」は俳諧師などの雅号。吉原遊びの連中にも通人めかして、この雅号をつけることが流行、雅号で呼び合った。俳諧の運座があるとの口実で家を抜け出すのに都合がよかったのであらう。さて、吉原の遣手婆が表徳をつけるとなると、さしあたり花一分に喜ぶのにちなんで「金笑」がもっともふさわしいだろう。

清「賛。「遊子方言」に遊人が表徳をつける会話があるから引用しておく。

（通り者）……貴様表徳があるか。（むすこ）あいどふぞおまへの字を取って、叩付被成て下されませ。（通り者）そんならおれが番町の番の字を取って、番景とつけよ、後にや、おれがやうに方々から番景さん／＼といふやうになる。

藤井「「響の表徳を帰柳と付る也」（傍一・36）と同工異曲。つまらぬ句。

高須「一分の金があれば程におかしいか

その時婆ア大音声で笑い 拾七・28

等ヤリテの笑いは、金と通じているので、号の「金笑」とは考えたもの……。

丸「諸説につく。

岡田「遊客が表徳をつけるのは、通人めかして得意になったのが第一の主因だが、蔭に実名をかくすイミが幾分あったのであ

本年の回顧



清水白柳

昭和四十三年十月二十三日は朝からの雨だった。この日を政府は「明治百年記念祭」を催す日と定めて、日本武道館で盛大な式典を行なった。地方ではあまり盛り上がりがなかったようだったが、とにかく明治百年ということに便乗している行事がよく目についた。派手だったのは商店街の売出しだけだったというのも何か皮肉な感じだったが。川柳大会に明治百年をうたったのは余り目につかなかったのは、昨年催された「平安川柳社」の明治百年全国大会で終った感じがしたのかも知れない。「ふあうすと川柳社」が合同句集に明治百年をかけたのは賢明なやり方だった。そのせいかどうかは判らないが、八九四名の出句者を集めたのは驚異に価すると思う。勿論その編集に当たられた人達の熱意とPRが実を結んだのだが、その中心となって献身

的に努力せられた、言也・天樹・不二也氏の労を忘れてはならない。殊に七月からスタートした、郵便番号を入れたことなど心憎いばかりの出来栄であった。「川柳塔」が明治百年に因んで「自選百句」を計画して目をひいたのはヒットだったと思っている。三月号からスタートして八月号までに十五作家の句を発表したが、多くの同人の中から選ばれた作家であっただけに反響をよんだのも当然であらう。

四月号には御病中の紋太先生をわずらわして「紋太百句」を掲載させていただいたし「同人百句集」も作品面では成果をあげたものの一つと言っているだろう。「川柳明治百年」を私が書いたが、大きな反響があつて案しかった。明治年代の句について註を要するものが多いので、いずれ改めて書き加えるつもりである。

今年発刊された句集にはグループでの合同句集が目立った。「ふあうすと」の合同句集は別刷ではないが、札幌川柳社、弓削川柳社の「川柳町」などの百五十名程の合同句集や年刊の「吉備園子」「国鉄川柳句集」「酒の句集」等々が出されて居る。また参加者三十名程のものには「銀箭」「ぼーふら」などがあった。奇しくも十一人の侍たちで出された句集に「療原」と「潮音」とがある。どちらもページを開けば火花の散るような激刺としたものである。「途上」は夫婦句集であり「両輪」「青い果実」などは二人の作品集で、個人句集としては「紋太句集」「老いの坂」「諷詩竜沙吟」をはじめ数多く出版されて、句集ブームの感があつた。

記念句会では何といつても、五月五日を期して行なわれた「一番傘創立六十周年記念行事」の一つである「全国縦断川柳作家大会」であろう、全国をハブロックにわけて同時開催という快挙をなしたとげたことである。関東北陸、東海、近畿、山陰、山陽、四国、九州のハブロックはそれぞれの地方に於ける有力な同人を選者として立てて、作家の結集を呼びかけたのであつたが、当日の参加者総数が一二七名とは意外に少なかった。大番傘としては、少なくともこの倍は参加するだろうと思つていたのだが、私の予想を下廻つたの

は何故なのだろう。川柳人口十万といわれている今日、これで成功だと祝っては居れないのではない、まだまだ考えなければならぬことがあるのではないだろうか。そうは言っても残念ながら番傘を置いて他にこれだけの作家を句会に集めることは出来ないのだ。

尚「ふあうすと合同句集」参加者八九四名のうち番傘の全国縦断大会に出席された一四名を差引いた七八〇名と番傘大会の出席者一二七七名を合計すると、二〇五七名が合同句集と番傘大会との作家定数ということになる。川柳作家はもっと積極的に行動してほしいと思うのは、私一人ではないだろう。

戦後に創立された川柳結社が今年で二十年に当たるといふその記念大会も数多くあった。「柳都」「せんば」「こなゆき」「白帆」「青森川柳社」「奈良番傘」などでそれぞれ記念大会が開かれた。「弓削川柳社」主催の「西日本川柳大会」は第二十回の大会だった。で、選者は、三太郎、生々庵、清造、聡夢民郎、東洋樹、文庫、風来子、弓削平という第一線級が揃っていた。大会当日の選者との質疑応答については池田あや子さんが「まさか」と十月号に「これからの川柳を考えろ」と詳しく書かれていたので、ここには触れない。岡山地方では句会の前日に前夜祭を持つことが流行している。私は今年もその前

夜祭に参加した。前夜祭のたのしさは、時間に追われることなく好きな相手と好きな事を語り合えることにあるのだ。かみしもを脱いで話が出る功徳がある。「番傘」が八月に高野山で開いたゼミナールの記事についての三太郎先生と聡夢さんのやりとりや、時事吟についての三太郎先生のお考えなど話題は豊富だった。だから前夜祭は楽しいのだと言ったらだれかに叱られるかも知れない。

「せんば」の二十周年大会は宣介主幹の古稀祝賀句会でもあったので出席したかったのだが、七月七日は路郎先生の忌日に当るので川柳塔では路郎忌を催すことになった為に止むを得ず欠席した。何故近い柳社であり乍ら同じ日にしたのかと多くの方からお尋ねを受けて困った。せんばの方は静夢氏が会場の予約を六カ月前に七月七日を定めて居られたので変更も出来ずということで重なったのだが、どちらにも盛会だったことでホッとした。

九月二十三日には川柳句会といえるかどうか知らないが、珍らしい会合に出席した。それは第四回の「大陸柳人同窓会」である。奈良県竜田のいかるが荘で八十名の柳人が各地から参加せられたが、同窓会開会までの時間や、懇親会の席上で、また宴会後の就寝するまでを、各方面の柳人と語り合えた。青竜刀夢二郎両先生には殊に川柳塔を激励して下さい、大八氏には同人以上の親しさでズバ

ズバ言って頂けたのが本当によかった。久しぶりの柳友とは手を取り合って喜んだ。大陸に關係のない私が出席出来たのも正夫氏のおかげだと思っている。宴会席上での天満千代さんの生一本な性格から吐かれる言説に敬服させられたのがいつまでも忘れられないだろう。句会のことばかり続くが、十月中頃から十一月の日曜は殆んど文化祭の川柳大会で埋められていた。関西地方だけに限っても十三日の豊中市民川柳大会から始まって二十

河相すゝむ追悼川柳大会

日時 十二月十五日(日) 午後一時
所 西宮商工会議所 五階会議室

(阪神電車西宮駅下車北東へ五分)
(国道線西宮市役所前下車北へスグ)

話 兼題
「古本物語」 堀口 堯人
「旅」 増井不二也 選
「雀」 松本 波郎 選
「靴」 三条東洋樹 選
「カメラ」 岡橋 宣介 選
「帽子」 西尾 栗 選

席題三題当日発表、各題二句以内。
会費二百円(記念品呈)
投句は大阪市北区堂島上二ノ五二

橘高薫風宛。

主催 明和川柳研究会
甲南川柳教室
後援 川柳塔社・ふあうすと川柳
社・関西川柳作家懇和会

日には尼崎市川柳大会。二十七日は西宮市、伊丹市、岸和田市と大阪近郊の都市で三カ所も重なるのは腑に落ちない。衝に当って居られる柳人の開きたいという責任感に判るが、阪神間六市で七月十四日に川柳大会を開いて居る実績もあるのだから、適当に話合せて合してもよいのではないだろうか、考えてみたいことである。秋の文化祭だけでなく、春秋二回大会を開く都市に、堺市、伊丹市、奈良などがある。大会疲れということも考えに入れてほしいと思う。そうした事にいくらか関係はあるのだが、昨年末から胎動していた「関西川柳作家懇話会」が誕生した。現在のところ個人的な交流の範囲を出ていないが、京阪神の各柳社の精鋭が名をつらねて居るところから推しても将来の活躍に期待してもいいと思う。

全国で年度賞を設けて、作家を表彰している柳社が数多く見られた。北海道の「オホーツク賞」「花童子賞」を初め「垂天賞」「柳都賞」「平安賞」「時の川柳社賞」など主なものだけでも十指に余る。「川柳塔」でも「路郎賞」は同人の作品から選り「川柳塔賞」は投句者の作品から選り今年で三回目の発表である。それぞれの結社での選考方法に事情もあることだから統一するわけには行かないだろうが、文学賞的なものにしたいと思っているのは私だけではないだろう。作家の表彰

について風来子氏は「ますかっ」と六月号で大会における総合点制に疑問を投げけている。そして七月号では重ねて「作品重点主義」でなければいけないと言っているのはうなずける発言である。ところが同じく八月号では垂天賞の作品に触れて、作品重点主義も、こうした句に接すると、作品を如何に選ぶべきかにも問題があるといっている。極左から極右までの川柳のひろがりの中で、一句を選んだ全部の柳人が納得することはあり得ないことだから、現柳界を代表する一句を選び出すのは不可能であろう。とすれば矢張り今のよう

に柳社単位で句であきらめるより外に術がないとはかなしいことである。

風来子氏が昨年末から今年頭にかけて岡山市文化使節として渡米され、在米川柳社を歴訪、大きな成果を挙げられたのは特筆すべき出来事であった。

ラジオではNHKの全国ネットで川柳の募集をして選評を放送しているのも今年に入ってからである。選者は中島生々庵、近江砂人両氏である。テレビにも川柳が採り入れられて生々庵氏が放送したのも極く最近のことであった。現代の文化人が川柳をどんなものとして認識しているかということになると実に心細い、殆んどが狂句を川柳だと思っているのだからやり切れない。その根拠がどこにあるかというと、川柳が発生して二〇〇年とい

うけれども、初代川柳の時代三十数年間と明治三十六年以後の約七十年とを除いての一〇〇年間はせんりゅうという狂句の時代だったのだから、その狂句を川柳だと思われても仕方がないのだ。樗元紋太先生が「古川柳」という名で研究家が狂句を採り上げていることに触れて居られるが、本当にそうだと思う。狂句が川柳ではないという認識を持ってもうたためには、まだまだ日がかかりそうである。根気よく運動を続けるより方法がないであろう。私等もその運動の一環として、ロータリークラブなどの組織を通じて川柳を知ってもらう話をしているが、川柳家一人一人が積極的に動く時期がきていると思う。

最後に今年も多くの川柳家が亡くなられたがそのうちでも、三月六日に神戸の藤本主税氏が六十六才で、三月八日には京都の藤本蘭華先生が七十六才で。そして六月十九日には堺の高崎雄声氏が六十六才で世を去られた。路郎先生と特別の交友であった信州の中島紫痴郎先生が六月三十日に八十七才の川柳家として昇天された。中でもショックだったのは、川柳塔常任理事でいつも先頭に立って居られた河相すゝむ氏が九月十九日に六十四才で急逝されたことである。古柳書の整理を半ばにしてあの世へ旅立たれたのは返す方がえすも残念なことだ。惜しまれたい。十月一日には京都の布部幸男氏が六十七才で逝去された。謹んで諸霊の御冥福をお祈りしたい。(十一月一日現在)

カナ書き

恐るべし

戸田古方

川柳に限らず自分の作品は間違ひなく読んでもよいものです。そのために文法を無視した送りカナを加えたり、それでも安心できないとはじめからカナの流し書きをすることがよくあります。例えば「背を」ですが「せなを」とも「せを」とも「せなかを」とも読めますが、どうしても「せなかを」と読んでほしい時には「背かを」と余分な「か」を加えるか、カナ書きにするより手がありません。しかし、カナ書きは余程気を付けないとんでもないことが起らないといえせん。

カナの読み違えから西南戦争が起ったという話を読んでびっくりしました。尤もこれは電文なのでありますが、西郷隆盛が私学校を興して壮士を養っていた頃、政府から現地鹿児島へ連絡した電文の中に「シサツ」という言葉が入っていました。雲行の怪しくなっていた際とて、電文を横目で見た薩摩っ子はこれを刺殺と読んで、折から川路大警視ら政府要人帰郷の目的を西郷先生刺殺と決めてしま

ったのでした。「シサツ」が視察であつたかどうか、カナの電文は永遠に語りはいたしません。この話のどこが山縣有朋公、人が人だけにさもありなんと面白く受け取られま

す。誤解であつたかなかつたかはとにかくとして、ゴカイという音でどんな言葉があるか国語字典を見ましたら誤解、沙蚕（魚釣の餌）

五階、五戒、暮会。面白うなってきました。五階は囲碁、以後もイゴでした。さらにイで引

いてみたら医、異、衣、委、五（五十鈴川）膽（胆）（熊の膽）易、意、胃、威、偉、そ

れに以と囲をいれると十三にもなりました。それならゴは後、御、豆（豆汁）伍、吳、期

基と八つ見付かつたのでした。字典の一頁からアの部を拾うとアイ（愛、藍、相、哀）アイ

ショウ（相性、哀傷、愛妾、愛誦）アイロ（文色）みわけ、隘路）アキ（秋、明、鮑）ア

ク（悪、灰汁）アサ（朝、麻）アシ（足、芦）アズカル（預る、与る）アタウ（与う、能う

アツイ（厚い、暑い、熱い、篤い）アメ（天雨、飴、鮠）アライ（荒い、洗い、粗い）ア

リ（蟻、有り）アン（暗、案、鯛、庵、安）名詞が多いようですが、名詞だけではありま

せん。形容詞も動詞もあります。この外同じ語源から出たと思われるもの、

アジ（鯔、味）おいしいからでしょう。アガノウ（購う、贖う）贖罪とは金で罪を買

こと。アナタ（彼方、貴方）自分から距つたもの。アオイ（青い、葵）葵の葉のおおきから。アカ（赤、垢、澹川船底の溜り水、銅、関枷）どれも赤味を帯びた色や感じ、関枷は仏教語、インド語で水のこと。アカシ（灯、証）灯をともしてはつきりさせる。とざつと

こんな具合、アの部だけでこれですから、全部丁寧に見たら大変な数になるでしょう。

これも電文ですが「ホンジツ△△ヘフジチヤクリクシタ」を不時と読まずに無事と読んで笑われたことがありますが、濁点まで入

れたらそれこそ想像に絶することになります。何しろ日本語にはこうした同じ音で意味

の違うものがこのようにうんとあるのです。これについて、私が貿易をしていた頃、一

人の中国人から「ニッポンゴタイヘンムツカシイ。ハナ、ハナ、ハナ。ハシ、ハシ、ハ

シ。ムツカシ、ムツカシ。」と。ハナは花、鼻、端。ハシは橋、端、箸。このハシは一休

さんの頓智語にできますのでよく御存知のことです。こういうと川柳でコトバの遊びを

しようとしているのでないかと叱られそうです。勿論、川柳は断じてコトバの遊びなどでは

なく、語呂合せでもありません。しかし、日本語を遣つて句を作る以上日本語というも

のをとつともと知っておく必要があります。

日本人は実に融通無碍な自由なコトバの遣

い方をします。アルサロなどという外国人に通じない外国語をどしどし今でも日本語として創造しています。アルはドイツ語のアルバイト、サロはサロンでフランス語、こんなことぐらい日本人にはへっちゃらです。古い所では峠や嶺という中国にない漢字を遣いなれてきました。どこの国にも外来語というものはあります。しかし、日本人は何のこたわりも、ためらいもなく自分の言葉の中に食欲に取入れてきているのです。丁度伝統を守るイギリス人とそれを便宜と能率のために崩すアメリカ人にも似ています。OKやKOはいかにアメリカらしい省略の仕方ですし、手近かなタバコのハイライト *light* もアメリカ式直輸入という感じです。やかましく英語のスペルを覚え込まされたものは戸惑いさせられます。

何といってもこの話の圧巻は万葉カナでしょう。漢字の音をとったり、意味をとったりまことに潤達自在です。古文書を見ていると漢文のところがあるかと思うとカナがあり、音だけとった万葉カナのような漢字が残っていたりします。アリガトウだって有難もあれば、難もあり、被遊、被下は随所にてきます。大体われわれが日常つかっている漢字の熟語は中国語の文法に従って動詞が頭に来ているのが多いようですが、音の流し読みで意味ぐち吞んでしまっています。その万葉カ

ナから片カナ、平カナが生まれました。丁度、エジプトの象形文字からフェニキア文字が、ギリシア文字が、そしてローマ字となつてきた今日のアルファベットに比べても見おとりするものではありません。日本人の先祖は偉大にもそれをやり遂げて来たのでした。

川柳はこの日本語の詩です。私たちは句を通して日本語を間違ひなく、ますます美しいものに磨いて行かねばなりません。カナの分量も一段とふえてきて、電文みたいなカナばかりの文や句が横行する今日この頃、前後の關係で大きな取違えはあまりないとはいえ、大切な要素であるカナを正しく遣いこなすように一層心掛けたいものです。

異本、柳樽について

吉田水車

古川柳は今では全く古典文学として斯学の研究対象となつていて、われわれ川柳子には何の關係もないもののようであるが、今日の川柳の芽生えを培かつてくれた先人の偉業を

しのお意味からやはり学究専門の士でなくとも古川柳の集成である「柳樽」の原本を一度は手にしてみたく思うのは私ばかりではないだろう。たまたま名古屋の丸善で(四三、五二〇)古書展示即売会の催しがあった際運よく「柳樽二篇」を発見して、よく調べたところ、寸法(一六〇×一一五ミリ)製本の体裁も想像通りで紙魚の跡もよろしく古書の体にならして、可有居士の奥付もあり、判元星運堂花屋久次郎も明らかに、かつ又「源氏活花手引草」「和漢軍談記略考」「誹諧書」等出版物の広告までしてある、ただ気になるのは印刷の年代が無く丁数も最終の四十一があるだけであったが、価もべら棒なものではなかったで、これを求めて後今では定本とされている岩波版山沢英雄氏校訂の「柳樽」及び西原柳雨氏の「川柳雑俳集」と照合してみたところ下記の二点に疑問が生じた。

一、表紙の題字「誹風屋奈貴多留」とある点
二、収容の全句には間違ひはないが各頁(丁)の句の配列が甚しく前後している点(別表参照)

一については私の乏しい資料からひろつてみると普通は「柳樽」であつて少しくあげると

- 初篇は 柳樽
- 二篇は 家内喜多留
- 三篇は 屋那支多留
- 四篇は 柳樽

十二篇は はいふうや那喜太流
十五篇は 柳 樽
十七篇は 家内喜多留
十九篇は 柳 樽
二五篇は 家名喜多留、等々がある。今回
の「屋奈貴」とあるのはいつの頃のものであ

ろうか。私なりの考えとしては当時の柳樽の
原本はそう沢山には印刷も出来なかったであ
ろうから、程経て増刷する際内容に新味をも
たせる意味合からか乃至は何等かの理由で各
頁（丁）の句の配列を変えて印刷して需要に
応えたものと思える。異本のあることは前記

照合著書の中にも記されている。異本の意味
が何であるか、又今回の柳樽が真偽のほども
判らないけれども自称して異本柳樽とし、大
方諸賢のご高教を乞う次第である。

収容句の丁数対照表

書 名		異 本	
岩 柳	波 版 樽 (二篇)	柳 樽 (二篇)	柳 樽
丁 数	丁 数	丁 数 (頁)	題 字
1	1	1	1 題字
2	2	2	2 2
3	3	2	3 3.4
4	4	15	29.30
5	5	9	17.18
6	6	18	35.6
7	7	33	65.6
8	8	32	63.4
9	9	34	67.8
10	10	35	49.50
11	11	26	51.2
12	12	37	73.4
13	13	31	61.2
14	14	4	7.8
15	15	3	5.6
16	16	14	27.8
17	17	13	25.6
18	18	10	19.20
19	19	23	45.6
20	20	12	23.4
21	21	11	21.2
22	22	27	53.4
23	23	28	55.6
24	24	29	57.8
25	25	30	59.60
26	26	39	77.8
27	27	36	71.2
28	28	35	69.70
29	29	38	75.6
30	30	22	43.4
31	31	19	37.8
32	32	20	39.40
33	33	21	41.2
34	34	7	13.4
35	35	8	15.6
36	36	6	11.2
37	37	5	9.10
38	38	16	31.2
39	39	24	47.8
40	40	17	33.4
		40	79
			80可有裏付

註：以上で見ると大体において
初めの方に終りをもつていき、
終りに初めのものを入れている。
岩波柳樽は1頁に16句収容。
異本柳樽は1丁二ツ折表裏に各
8句宛計16句となっている。

二 賞 に 思 う

金 井 文 秋

今年度の路郎賞、川柳塔賞が決定された。
第一回の時もそうであったように、評判は必

らずともよいとは言えない。
もともと誰からも満足の得られるような句
が無いのではないだろうか。有るくらいなら
四人なり六人なりの選者が、一致した句を抜
くはずである。
さまざまな句を最後に決定権を与えられた
選者が決めるのだから、どうしてもその選者
のカラーに合ったものを選ぶことになる。
それでいいではないかと思うのだが、そこ
は凡夫のあさましさか、兎に角がやや言う

抜 け る

てみたいものだ。それも大いに結構、それに
よって作家も伸び、選者も勉強になるなれば
やがては川柳の発展につながって行くのだか
ら。
抜けるという言葉がある。川柳でも何句抜
けたとか、抜けなかったとかがよく話題にな
っている。
私が最初この言葉を聞いた時には少し妙に

思った。元来抜けるという語は、上へ抜ける場合と、下へ抜ける場合とがあるからだろう。

あいつ抜けてると言われたら阿呆の事だし図抜けた人と言えは利口の事だ。句が抜けたと言えは選に入った事だが、逆に選から洩れたように聞かえはしないだろうか。何時だったか、抜けましたかと聞けば、選から抜きましたと冗談を言っていた事があった。

現在では聞きなれ使い馴れて、何んとも感じなくなったが、その時は少し抵抗を感じた。それは抜けると言う言葉が悪い意味に使われるのを多く聞いていたからかもしれない。間抜け、底抜け、腰抜け腑抜けなどである。良い意味では、抜群、抜萃、抜擢、選抜と、いずれも(はつ)であるのもおかしい。良い意味でも悪い意味でもないのは、生え抜き、息抜き、抜け殻、抜け駆け、抜刀、奇抜などで、抜の熟語は随分多い。さがしたら五十語はあった。形容詞では絵から抜け出たような美人などもあるが、一般になじまれている熟語は半分位のものだろう。

抜の字程よく使われる文字も少ないだろうし、付ける語によって随分巾の広い使い方があるのも珍らしい。

それを単に抜けるだけで、選び抜かれたと通じるのも、いかにも川柳的であるようにも思う。

朝日放送(ラジオ)

川柳たばこ

小ばなし

不二田 一三夫

★きょうのおはなしは、川柳作家の不二田一三夫さんです(十月二十一日から放送開始)

×

―灰皿へ口紅ついたのもまじり

(美能里)

「灰皿へ口紅ついたのもまじり」というのですが、この川柳からは、若い女性が、今までそこにいたことを表現していますね。

かりに、この灰皿が、家庭内のものとすれば、奥さんの不在中に、どこかの若い女性がたずねてきたことになります。

そこでこの口紅のついた吹殻を見つけた奥さんは、かならず、だれが来たのかと、ご主人を責めることでしょう。だが、口紅がついている以上、その訪問客が若い女性であることには間違いないので、ここでご主人は、アレコレヤと弁解一方になるわけですが、あげくの果ては、首をしめられネックレスの一つぐらひは買わされるハメになることでしょう。

う。

だから、灰皿ぐらひは、いつも自分で片づける習慣をつけておきましょう。

★ただ今のおはなしは川柳作家不二田一三夫さんでした。

×

―末席の煙草 小皿をあてがわれ

(万 古)

「末席の煙草小皿をあてがわれ」というのですが、これは宴会などで、よく見られる場景ですね。

上の方にいる人たちには、だいたい、一人に一個、または二人に一個ぐらひ、灰皿が置いてありますが、下手へ来ると、三人か四人に一個より置いてありません。そこで、小皿などが灰皿のピンチヒッターとなるわけですが、ときには湯のみ茶わんなども灰皿がわりに使われることもあります。しかし、こういうのは、ただだけませんね。第一、見た感じもわるいし、それに皿を洗う人たちにも気の毒ですよ。

「なんですって？古い皿なら、いくら洗っても、新らの皿にはならないから、かまわんではないか」

いやー、そんな冗談を云ってはいけませんナ。

よく徹夜マージャンなどでも、コップなどへ吹殻をほりこむ人がいますが、ああいうこ

とをするから、奥さま方に徹マンはイヤがられるのですよ。

×

― マッチするのにもチップという手つき

(鳴 恍)

「マッチするのにもチップという手つき」というのですが、これはいうまでもなく、パークキャバレーのワン・カットです。

美人がマッチを擦ってくれたのですから、さぞ、タバコもおいしいでしょうが、チップのことを考えると、それもヤニ下がってもおられませんか。

「うちの女房はテンで気がきかないんだ。ほかタバコをくわえて、マッチをさがしているのに、ゼンゼン素知らん顔なんだ」

という方がいますが、奥さんだって、マッチを擦ってくれたら、せめてフロア錢ぐらのチップをはずんでご覧なさい。もっとサービスをしてくれますよ、それにタバコを買いにやる場合には

「ツリはいらないよ」というぐらいの太っ腹は、やはり奥さんにも見せてほしいものですナ。

×

― 掌(てのひら)が灰皿になる野良仕事

(満佐志)

「手のひらが灰皿になる野良仕事」というのですが、これは農村生活者の、ちよっと一ぶ

くといった一コマです。

あぜ道か、そこいらに腰をおろした老人がウマそうにキザミタバコを吸っている情景がありありと目に浮かびます。

汗で鍛えあげた手のひらが、灰皿がわりをするのですが、手のひらへ落した吹殻が、次ぎにキセルへつめるタバコの火ダネとなります。これでマッチ一本の儉約になるし、マッチを擦る手間もはぶけるといふものです。しかし、都会生活者のやわらかい手のひらではとても灰皿の代わりなんか出来ませんね。しかし、今日では、もう農村でもキセルなんかでキザミタバコを吸う人もいないでしょうが、手のひらは、ツラの皮ほど、そう簡単には厚くならないでしょう。

×

― ライターを持って マッチ持って去に

(藤 波)

「ライターを持ってマッチ持って去に」というのですが、このごろは喫茶店へはいても請求しないとマッチをくれなくなりまして。まあ、八十円か百円のコーヒー一ぱいで、いちいちマッチを出しては商売に合わないのでしょうが、そこはそれ、お客のほうでは一日に一個のマッチがあれば、市場でマッチを買う必要もなくなるので、これも健全財政への一歩かも知れませんか。ぶっちゃけたとこ、お互いに儲けが少なく

なりましたから、どケチこそ、現代生活の金科玉条ということになりましょうか。

だから、なんでも、タダで貰えるものは貰っておくことですね。

×

― 手巻きとは云わずコロナの箱で吸い

(潮 花)

「手巻きとは云わずコロナの箱で吸い」というのですが、この川柳は、第二次大戦当時の愛煙家をうたったもののようです。手巻きというのは、タバコの粉を一人何グラムで配給されたものを、タバコの紙の上へのせて、それを手で巻いて、いわゆる巻きタバコを各自でつくって吸ったものです。

戦争による人手不足や物資不足で、ついに芋の葉までタバコとして吸うしまつでした。その当時のコロナというタバコのおき箱へ、その自家製のタバコを入れて「ばくはコロナを吸ってるんだぜ」と見せびらかしたものです。

タバコ一個買うために、前の晩から行列をして、その売り出し時間を持ったものです。戦争はイヤですね。もうこんな苦しい経験だけはケムリにしたいありません。

(小谷葉子整理)

▼十一月号の石倉旅風氏の句を―妻の留守孤独どころか飯が焦げ。弱い人もろたもんじやと肩を撫で。自選百句 六月号―よく見ればいるあれもあれも亀―と訂正。

秀句鑑賞

—前月号から—

後藤梅志

過去を断絶華麗に滝落下

(干梢)

この句は滝の描写句として、特異である。「過去を断絶」としただけで、落下する滝の景状にはふれていないが、そこがこの句のおもしろさである。

滝が、滝となるまでにはながい道中があり分け入る人もすくないが、爛々たる、隘路をめぐり岩にせかれ、草むらを越して、溪流となつて滝にそそぐものであらう。あだかもそれは人の一生の如く、艱難の連続であるが、人はそれを見ようとしなくて、ただ落下する滝の華麗さにうたれる。きびきびした省略であつて、用語の配置もまた見事である。

悼 河相すゝむさん

面影の中折帽と旅鞆

(薫風)

十年ほど前であつたか、阿倍野句会で、大西野介さんの追悼句会があつて「面影」という題が出たことがある。当日は大変な盛会で、各社からベテランが多数参加、六十名を越していたが、選者の路郎師は、十句しかとらなかつた。その天の句は「ぜいたくをし尽した人壁に掛け」という句で、参会者しばらくは声もなかつた。恐らくはその句意が果して「面影」の題意に叶つたものであるかどうかを疑つたものであらう。作者である小生も半信半疑のままであつた。路郎師は披露に当り「面影」はむづかしかつた、洩らして

いたが、誰れもがむづかしかつたのである。十年も経た今日、私は「面影」のびつたり当てはまる句に出会つた。それがこの句だ。すゝむさんという人の人柄は、十一月号の薫風さんの追憶でくわしいが、そぞろに暮わしさが増し、今となつてはその面影をどこに求むべきか、静かに目をとじる外はないが、いつも思い出すのは、重たそうに抱えていた旅鞆と、余り披つた姿は見えていないが、丸めたようにして携えていた中折帽である。そそくさとした中にいつも何か親しみをたたえていた。ああもうすゝむさんにも会えないかと思つと、いつも目に泛ぶのは「中折帽と旅鞆」である。

ただうらむらくは、この句の「面影の」がびつたりと、感じうる人は、交友の中でもごく限られた人々のみではないかと、思われることである。

シャボン玉大人が吹けば淋しそう

(酔夢)

シャボン玉の吹きかたは、昔といふまではいふ交つてきた。いまは麦わらの先から小さいのがパラパラと、無造作に吹き出されて何の変哲もないが、むかしは、直径十センチぐらいのものできた。洗濯石けんでもよいが少しどろつとした中へ、松やにの結晶したのを溶かし込む。そろそろと吹いて、最後はふつと吹き出す。ゆっくりと地上へ落ちるまでに、とても綺麗な色彩が渦を巻いて見えたもので、これなら大人でも充分たのしめた。しかしこの句は、単に実在のシャボン玉だけのものではなく、作者の何かこころの中に満ち足りぬものがあつて、それを句にしたようにも思えるのである。

記憶喪失視線は妻のものではない

(芳仙)

この句はどうした場合の句であらうか。

単に記憶喪失では判からないが、もし健忘症の重いものであれば、全く過去の記憶はなくなる。人間の目は、現在意識を支えている唯一のものといつてよいが、一時的に記憶が喪失してキョトンとした時でも、目は空ろになる。平素のその人ではなくなるものだ。この句で判かることは、人間の五官の働

きは、つねに過去と繋がっているもので、現在だけでは役に立たないということだ。周囲の人の悲しみと歎きをよそに、本人はきょんとしている。これほどの悲劇はない。

まだ売れぬ画家で美術史など教え

(清生)

庶民的なおいのする句だ。

ふつう画家として、絵が売れるということ、最大の喜びだが、その域には仲々達し難い。多くは異様な服装で画布を抱えている。

しかしこの句の主は、臨時の教師でもある。志はあっても全く未知数の画家で、わりに香気な素質もありそうである。その辺が庶民的と感ずる所以で、時代の匂いがする。この頃みる社会機構では、優秀な素質があっても社会の表面に出ることは仲々むづかしい。

目だたぬ句だが、作者のけれん味の無さが落ちついた句にしている。

秋たちてあおんぼろの我を知り

(紅雨)

一年のたつのは早いものだ。老いも若きも忙しく暮らす人も、呑気に構えている人も秋立つというのには淋しいものだ。もうすぐ正月が来るではないか。なんと人生とは、速しいものかと思識する。

ふと我れに返えれば、足袋は穴が開くし、袖口は破れていて、おんぼろを纏うているの

に気付くのである。衣類や足袋ばかりではない。頭の中も、からつきし意気地がなくて、何一つ目立ったこともしていない。ああ我れ人生に破れたか、とほろっとする。

一票を書く鉛筆のさりげなし

(静歩)

投票場の風景というものは、どこでも誰れにも拘束されず投票が出来るように、見通しのいい、ただ投票用紙に認める場所だけがかいをして、自由な雰囲気と、厳肅な感じとが与えられるような設備にされているが、どこか窮屈なものである。そのせいか誰れもがさりげなくボックスに這入り、さりげなく鉛筆を走らせる。一様に押し黙ってするその動作は可笑しいほどだ。ここにも飼い馴らされたような、日本人の几帳面さがある。

この句は、機敏にその動作を捉らえていて、たくみな味がある。さりげなしがよろしい。

オガ屑も木曾や秋田の香を残し

(志賀夫)

素人の吾々には、オガ屑の特有な匂いの中に、木曾のヒノキや、秋田スギの匂いがまじってというようなとは、信じられぬ気がするが、商売人の鼻はちがうものと見える。

この句はしかし、川柳家らしい感覚がはたらいで、句としての清新さがある。

情緒というものは大切なものだ。現実感と

して、現在の社会は余りに情緒に乏しく、作句生活は次第に狭められつつある感もあるが、現実には、作家の生活はない。オガ屑のなかから、木曾や秋田の香りを見出すことも、これに連なる努力といえよう。

二腹は立っても丸通へ出す荷物

(不二)

丸通は横暴だ、不親切だという声は、これ迄もよく聞いたが、果せるかな此の春以来、醜態をばく露して大変な騒ぎになった。

よい気味だとは思ふものの、現今の機構では出荷物を依頼するには、丸通以外にない。腹が立つがしかたが無い。というこの句は、われわれの共感をそそって止まない。

戦争に負けたということは口惜しいが、それにも増して腹が立つのは、戦時の統制経済というやつだ。まだどこにも、かしこにも、統制経済という化物が残っていて吾々を苦しめる。政治家はのほほんとして居据っている。佐藤さんが不人気なのも当然のような気がするのである。

秋田実主宰・不二田一三夫編集

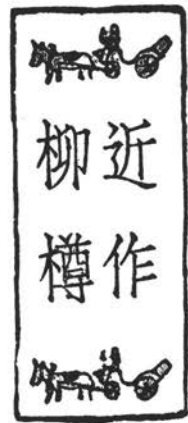
川柳家に好評

月刊「漫才」

発行所

大阪市生野区勝山通六ノ七九
電話大阪(七一八)三二一八

定価 百円
送料 六円



西尾 葉選

和歌山市 仮 家 和 美

ひがん花思ひあぐねる歩に燃える
花閉じた木槿と共に今日も過ぎ
もいで来た柿のぬくみの野の気配
何かあるねじむいた蜥蜴そのままに
灯を消せば十葉の花まで月届き

姫路市 前 田 芙巳代

日記には好き好き好きと書けるのに
ナイト(騎士)誇りはもてずボタンの支柱
ミニスカートをねらって風は失望
栗の渋皮をむく秋の悔始まる
偽りの泪で染まる黒真珠

島根県 小 砂 白 汀

これもこれもこれも孫抱えこみ
鍵穴は拒否するすべを知らざりき
姉いもと夜どおし喋るなつかしさ
工場が昔栄えていたポプラ

島根県 堀 江 正 朗

飲む会へ飲むなと妻は念を押し

音だけに生きて今宵の虫の声

誰も見ていないと思うた大あくび

鈴虫のいそうなところへうづくまり

鳥取県 鈴

木 村 飄 子

老の自己満足葬儀費を貯め

点数を稼いで酒で又引いて

女房に叱られたのでウロチョロし

東京日光観光

鳩の群靖国神社らしうする

大阪市 堀

口 欣 一

父と子と違うネクタイ止めの位置

サン格拉斯一家日本人らしい

二十年脊水の陣布いたまま

標札もなしに儲ける鉄工所

大阪市 小

谷 葉 子

遠花火一役買うて愛に濡れ

倅せが消えそう貝殻に手をふれず

寂光院（二句）

紫匂う深山にみ仏のもと夫のもと
夕立にむせぶ 苔 寂光院

出雲市 竹 内 李 朋

懐手竜馬を意識してる秋

陽溜りへ五百羅漢が身を寄せる

メキシコ五輪

セニヨリタラストを走り抜く聖火

倉敷市 藤 井 春 日

松どんと呼ばれた頃もある社長

共稼ぎの誤算女房に虫がつき

請求書お旦那様と喜ばせ

岐阜県 市 川 鱗 魚

オイコラと言えず巡査のヘルメット

酒たのし春夏秋冬陽の恵ぐみ

とぼしくも俺には妻と言う味方

竹原市 三 宅 不 朽

鏡ふと女だけのものでなし

さまざまな雲湧く日なり落つかず

信じたい色赤チャンのさくらいろ

大阪市 江 城 功 雄

癒えたしか空に見つけた秋の色

らせん階段焦らされる愛に似て

振向けば想い出だけが追うて来る

東大阪市 坂 上 山 椒 坊

哲学書捨てフーテンの群の人

定年へ慌てる老後の青写真

男子寮造花の色も褪せたまま

東大阪市 坂 東 若 芽

可愛げになればうち似だ僕似だの

闘病十年誰れかの植えた柿がなり

喧嘩ばかりしていた人を恋うも秋

島根県 堀 江 芳 子

対座して激しき鼓動きみのもの

終い風呂溢れ洗濯したくなり

まばたいて嬉し涙を弾き出し

大阪市 梅 園 摩 耶

祖父の葬式にて（一句）

面影を追えばまなざしほほえみて

名月をビルの谷間に見る哀れ

ジャンケンポン今日は私が床を敷く

大阪市 和 田 痴 亭

天高し子に依る老後バラが咲き

聴心器歳月久し象牙いろ

はぜ紅葉女の寝顔の美しく

新潟県 高 野 不 二

豪快にのもうとテレビ迄さそい

汽車にのる悲喜交々の顔と顔

子に叱られながらも母の寝てはいず

広島県 高 橋 鬼 焼

たよりない男にされた靴すべり
道づれとなる人妻と距離をおき
無花果の自爆平和な地にかえり

鳥取県 近

藤 秋 星

カマキリの何か思案をする如く
明治百年ミニスカートは花ざかり

姫の結婚に

しあわせの花は努力の木に開く

尼崎市 中

溪 慶 彦

お見舞に來てまで吹かす社長風
角瓶の差入れがある寝台車

帯解いて妻は茶漬けで喰べ直し

今治市 米

子 映 月

養子だと言えはお宅もかと言われ
食欲がないのに見舞品の山

歩道橋つくづく齡を思い知り

熊本県 北

川 一 進

日記帳ペンが止まった虫の音
お人形ママそっくりに抱いてる子

月なんかどうだって良い二人の手

愛媛県 澄

本 満 子

駅弁は食はず嫌いの旅知らず
人生へ離婚と云う途中下車

更年期ネグリジエを派手に着る

河内長野市 小 川 耕 人

栄光の背なにかげ口ささやかれ
ささやきも唯一言の廻り道

北朝行在所にて

心痛に追われ追われた行在所

倉敷市 小

野 克 枝

障子貼る女悟った糊をつけ

曼珠沙華他人になってからの赤さ

苦しさを抱いてこんなによく肥り

島根県 中

島 英 子

身障者揃わぬ行進拍手され

バランスのとれぬ肢体へ血がたぎる

慰霊祭子の声に似た弔辞きく

松江市 村

松 醉 歩

からたちの垣根二度目の人と住み
黄な黄いなカレーライスに秋味覚

盲導犬横切る足に狂いなし

出雲市 板

垣 草 丘

世話をした甲斐がないよな団地族
この家を三十娘が暗くする

城跡に県庁を置く施政ぶり

大阪市 島

野 県 吉 郎

片道はよちよち昇るスベリ台
雑念を払えば座禅寝気さし

見くびった鰯の骨がのどに立ち

尼崎市 中 谷 利 美

成るほどとご尤もとが採めている
妻の眼が嘘おっしゃいと笑つてゐる
別館が出来て客筋わるくなり

京都市 明

妻という強身女の座を忘れ

日曜を寝たい夫に出たい妻
水を撒くホースを下げて今日わ

鳥取県 川

崎

秋

女

十二月走れば猫も走つて来

整形の鼻に出合つた久し振り

も一人の私が陥るコンプレックス

米子市 源

氏

勝

久

栄転が餞別までもかき集め

駐在の机に猫が寝て平和

エプロンに芋をつつんでしゃべりに来

鳥取市 藤

本

恵

子

青空の広さへ風船逃げてゆき

ベビー靴一步一步へ広く除け

よう忘れますわと自慢のような母

愛媛県 渡

辺

あきら

後晴れの予報今日から菊ひらく

館報編集発行十三年(二句)

読む先に誤植をさがすくせがつき

掌中の珠も中学二年生

大阪市 河内屋

源

七

年の瀬を鼠小僧も現われず
だしぬけのマイクの声は共產党

大阪市 有 信

新之助

婦人講座幸い女房忙しく

トタン屋根気易く待つて揺り返し

堺市 藤 谷

象 園

雑犬の劣等感なくじゃれている

何処にでも眼鏡忘れる年となり

静岡市 多々良

空

内職を隅へ追いやる子の宿題

さえずりに似て散りゆけりPTA

岡山県 目 賀

芳 月

ひっそりと明治はここに忠魂碑

日日多忙月賦に保険授業料

米子市 林

瑞 枝

娘の婿へ息子に内緒の荷を結び

切角の帰省も嫁の里へ行き

米子市 八

木

千

代

造花にも似た妻の座で陽を探す

開発が過疎を招いた山の村

東大阪市 宮

西

弥

生

長生きの倅せ孫に囲まれる

独立の女マンションせまく生き

出雲市 王

紫

みほとけも私が泣けば泣いてはる

ナチュラルに見せる技巧のメーカー

守口市 岸 本 豊平次

未亡人の気楽さ妻が聞いて来る

日曜大工一週間の邪魔残し

七尾市 松 高 秀 峰

小包に秋の味覚の詰めきれず

出張へせめてネクタイ替えて行き

和歌山市 増 田 次 章

表札も五度の転勤耐えてきた

バスガイドマイクはなせば土地なまり

高知県 長 田 正 一

台風銀座土佐っ子それほど気にもせず

いいかけてやめる子供も貧を知り

羽曳野市 飯 田 一 治

早乙女の泥を洗うてハイヒール

七人の敵もひそんで都会の灯

島根県 志 賀 美 栄

我が不精たしかについだ娘にあわて

忘却の彼方に赤き曼珠沙華

堺市 羽 田 一 扇

茶問屋へ行ってコーヒー出されたり

灯を消して妻は冷めたい足を入れ

八尾市 高 杉 千 歩

明治百年ドラマに玉音生きている

八百長のようなビジネス秋の風

名月と別に人間様の恋

チクタクチクタク逆立しても同じ音

竹原市 生 信 笑 子

我が影を踏めぬ月夜へ悟りかけ

病む姑へ嫁の手料理みなおされ

島根県 大 森 孝 華

ふるさとの名前が売れた大惨事

澄みきった空で動かぬ赤トンボ

河内長野市 井 上 喜 醉

捨て切れぬ古家具を持ち2DK

ユーモアを持ちたい背なで蜂が舞い

大阪市 加 納 楽 々

茸取れず敗残兵を思い出し

煩惱の下界笑うて雲の峰

小松市 四 方 天 弘 美

相談欄投書マニアにあやつられ

タイムカード遅刻も無いのが平社員

大阪市 西 本 保 夫

満干に合せ島民今日も生き

退職の五分前まで意地を張り

新居浜市 村 上 水 軍

清貧に慣れて表札の文字薄く

泣き笑い人生裸で生れて来

八尾市 香 川 醉 々
尼崎市 平 井 露 芳

金魚鉢金魚己の顔を攻め

ビール値上げ

三円の値上げも政府よう止めず

竹原市 時 広 一 路

力瘤くらべあつて湯気の中

受けとめる心の底に巻いた渦

大田市 藤 田 軒 太 楼

自惚もあつて涙にしてやられ

初孫のヨチヨチ人気を一人占め

呉市 榎 田 英 詩

秋晴れに物干竿がまだ不足

児の育ち手足の取れたお人形

堺市 斎 藤 亜 也

押したベル思わぬ響にあわており

悪縁ねといわれくすぐったい男

羽咋市 三 宅 ろ 亭

人生へ疑問符抱いて今日も暮れ

主観と客観論を続けてバスを降り

京都府 福 村 飛 龍

角棒が学用品とは知らなんだ

ちよっと熱出れば香港風邪にされ

大阪市 河 原 林 比 呂 路

露にぬれ一夜の夢見る月見草

酔うにつれみんな美人に見えて来る

大阪市 田 中 多 幸

万燈籠おぼろに浮ぶ鹿の影
代表の抗議に横向く廻り椅子

高知県 山 川 勝 子

仲人の口はどの娘も九十点
子の日記親の喧嘩もつけてあり

和歌山県 ふきあげ 虎 城

ハイウエーもつれてしまひそうなビル
ゲーム盤子の指示により妻と組む

大洲市 堀 内 曉 風

おとぼけへ女の勘のするど過ぎ
カーテンも替えて転任気もあらた

西宮市 加 納 山 楽

矢絣が良くにあう妻でありにしが
飾窓石一きわ光る値段書

鳥取市 有 田 鹿 の 子

帰省子の便りぬかみそ恋しがり
こおろぎよ泣くな寂しい夜だから

香川県 西 山 綾 子

パーマかけ私を追い出す顔が出来
事故多く水盃のいる旅行

今治市 原 田 輝 親

瀬戸内に住んで冷凍サンマ食う
秋の陽の中にトンボと俺という

羽曳野市 榎 本 吐 来

遠廻りして人の世がわかりかけ

一言が多過ぎた日の夜の枕

泉佐野市

大

工

静

子

病身は今日も晴着出して見る

針仕事器用に使う左きき

羽曳野市

麻

野

幽

玄

雑草のここにも秋の実を結ぶ

逢わなくば愛しきものを逢えば愚痴

広島県

南

条

露

声

ばあちゃんの念仏子の分孫の分

飛出して金の無心が初便り

松原市

守

屋

万

竿

運動会子がストレスを解いて呉れ

馬肥ゆる秋血圧をつい忘れ

泉佐野市

大

工

チ

ヨ

娘等嫁ぎ安堵の後のやるせなさ

夫でも句のライバルで意欲もえ

寝屋川市

福

富

隆

子

還暦のまだ末っ子は中一年

定退のまだ一齒だに虫くわず

竹原市

森

井

菁

居

かかる日も潮は正しい時差で満ち

落ちて尚柘榴未練の口を開け

岡山県

片

山

雅

子

ブロックの穴からコオロギのぞいて出

製材を運んだ軍手に香が残り

大阪府

田

真

砂

空しきもの夫と距離ある夜の対話
今日を生きる心のよりど薔薇真白

鳥取市

谷

尾

透

風

誰にでも困ってますと未亡人
門衛は堅い身分の捨てどころ

豊岡市

不

二

本

和

久

手がかりが欲しく刑事お茶を淹れ
今置いた物をさがすも歳かいな

鳥取市

藤

本

鎮

也

信仰と別に観音像が好き
大花火今日の人出の影も撮り

京都市

藤

本

征

山

温泉の宿又奥さんが変って来
肩少しもんであげたを疑がわれ

鳥取市

藤

本

和

宏

すぐに寝る酒の父ちゃん親しまれ
兄二人マグロのように昼寝する

鳥取市

河

口

忠

志

台風跡も消えぬに又襲い
義理と云う溝が不良へ追いつめる

鳥取市

中

田

吉

春

見た目だけ涼しそうな夕涼み
最高と最底が出る発表日

鳥取市

河

口

美

代子

洞爺湖の碧の記憶消えず恋い
病室を明暗二分して暮れかかる

鳥取市 中

沢 慎利子

泥溝の赤虫染しそうに見え
旅行から帰る団地の狭い家

鳥取市 山

本 珂也女

なにげなき言葉の中に鍵を秘め
繰り返し君の名水辺の砂にまるき

鳥取市 藤

本 佳女

醉眼へ美人に見えるネオンの灯
松園は自分によく似た美女を画き

鳥取市 福

山 貴恵

病癒えた歓喜世間が広く見え
不意の客留守番させて買いに出る

羽曳野市 前

川 桂馬

満員の電車で水虫また暴れ
コスモスの執念折れても花咲かせ

青森市 岩

淵 一星

カラ瓶の姿もいやな二日酔
バイク屋のバイクこわれるような音

河内長野市 森

本 黒天子

意地っぱり長の長くつづかぬ老夫婦
色づいた柿を見上げて湯にしたり

豊中市 河

本 雪男

ゆったりと流れる雲にあるところ

かたことが我が家の主役夜の膳

竹原市 出

島 静波

言い切れぬ啖呵人として妥協
本音吐いてる酒の坐にひたり

鳥取県 谷

無 閑

今朝秋と知って日課の試歩軽く
欲情をさげすむように虫の声

熊本市 黒

田 緑

ベレー帽巴里を毒味した角度
どっと来てピエロに冷える舞台裏

笠岡市 高

木 洪柿

路地裏のタドン工場ヘイヤリング
社前の鈴へ母の祈りが通う音

羽曳野市 樋

口 一峯

やけくそで歌っているんじゃないらしい
鶏がアヒル育ててもてあまし

八尾市 古

川 鶴声

付き合っただけでマスコミ騒ぎ出し
ベテランの顔が汚職に引っ掛り

米子市 河

瀬 茂人

僕の犬昼寝していて飯も食い
父ちゃん友達の家大きいね

高槻市 山

田 スミ子

どうにも出来ぬ家計簿赤字つづきなり
言うだけ言うてウップンホットする

長野県 中
静けさは独りぶどうの木と対す
ふるき墓ただ一輪の葵咲く

出雲市 柳
あの窓も眠れぬ夜か灯がのこり
東京の色で娘が帰省する

長野県 和
稲妻がきらり病身さしに来る
追憶はいつも枯野の色まとう

島根県 安
リズムカル湖の最中へ櫓のきしみ
京都府 菊

和歌山市 増
別れぎわ未練の手は肩へゆき
あてのない道でばったり昼の月

尾 愛
楽 やすお

田 静 子

井 寿 年

沢 破 天

田 志津穂

八幡浜市 別 宮 す き
大空にむかいコスモスゆれどおし
姫路市 大久保 大夢子
いつまでも生きて暖冬めぐり来ず

室生寺 大阪府 藤 田 頂留子

御影堂のしじまに座して無我の境
諫早市 原 田 明 春

手不足というがこれだけのラッシュアワー
石川県 国 分 狂 興

寺の炉もおいろけ話におちてゆき
藤井寺市 田 中 庸 晃
故郷の山に似てるが雲はよそよそし
大阪府 岡 本 まさひろ
こんな時だけ重宝がられる生き字引

川柳塔社常任理事会

十一月四日六時から本社で常任理事会
が開かれた。

大阪文化祭川柳大会を、どうして成功
すかにポイントをおいて検討した。毎
年のことだが、新しい人を集めることの
むずかしさは、やはり同じで当番側とし
ては頭の痛いことである。

年々、なぜか熱がうすれていくよう
である。これではいけないとおもう。

不振の原因は開催日の祭日にあるのか
まだまだ研究の余地がありそうである。

当日の受け付けや、ほかにいろいろお
手伝いを願わねばならず、とくに女流作
家には、毎年のことながら、一役持って
いただくことになった。

二賞発表方法や、選考方法など、反省

を兼ねて論議が交わされた。いろんな案
が出され、よりよい二賞にするため思
きった発言もあった。

出席―清水白柳・戸田古方・西田柳宏
子・傍島静馬・中島生々庵・大坂形水・
金井文秋・橋高薫風・不二田一三夫諸氏
(川村好郎氏が風邪で欠席されたことは
めづらしい)

―八時閉会。

川柳徳川記 (一)

富士野 鞍馬

前に「川柳源平記」「川柳太平記」「川柳戦国志」を書いたので、続いて徳川十五代、江戸時代も書いておきたいという念願から、この「川柳徳川記」を編録した。

古川柳は、江戸中期に、江戸の作者で作られたものであるから、その時代の常識や法令に従って作られ、政治批判の句は見られない。けれども、庶民の盛りあがる思想が社会状況に映って、十七音詩に表われている。それを収録して、徳川十五代につけてみたのである。

俳風柳多留は、天保十二年の改革で終刊になっているから、随って採用の川柳もそれまでということになる。

これを書きつけてきて、気付いたことは源氏・平氏が交替で天下をとっていたということである。平清盛の六波羅政府から、源頼朝の鎌倉幕府、それが平氏の北条に替り、源

氏の足利室町幕府となり、また平氏の織田信長が出て、豊臣氏がこれを継いだ、ついに源氏の徳川幕府となった。徳川も七代までは秀忠系で百十三年間、八代以後百五十二年間は吉宗系になって終っている。清盛の六波羅から七百七年であった。

徳川氏世系

頼山陽の「日本外史」には

「徳川氏は新田義重より出づ。義重は、清和天皇八世の裔なり。天皇の孫の経基、始めて姓を源氏と賜わり、降りて武臣となりぬ。その玄孫は義家なり。義家の子の義国上野に居り、新田、足利の諸邑を食み、義重及び義康を生めり。義重は新田を氏とし、義康は足利を氏とす。共に宗子の源頼朝を助け、王命を以て平氏を討滅しぬ。頼朝は征夷大將軍となり、府を関東に開き、義重

をして寺尾城を守らしむ。義重に五男有り其の第四子を義季と曰う、義季は徳川の邑を食み、因ってこれを氏とせり。」と、徳川氏は源氏の系統であることを明らかにしてある。

享保の「御家記」には「御当家御出世之起」として

「一、人皇五十六代清和天皇より十八代、新田親氏者、其比足利家発興、新田は狭められ、親氏上野国新田福昌寺へ喝食也。然共足利近所たる故難隠、時宗の上人に付廻国、法徳徳阿弥。三州酒井の郷に留り、傘を張せられ年をおくり給。此所にて御子一人出来酒井家はなり。其後松平太郎左衛門尉と折々連歌の会有り。或時、松平へ御越の節、太郎左衛門の曰く、貴僧の体常の人とみえず、我女子一人有り、聚合て我跡を譲るべしとあれば、則領掌有りて、太郎左衛門名跡と成、松平太郎左衛門親氏と号、松平の初なり。康親は右の女の腹也。家康公は、親氏九代の御孫也。」と書かれ、親氏が、清和十八代とあるが、これは十一代にあたる。親氏九代の孫が家康ということは、

義重、義季、親氏、有親、信光、親忠、長親、信忠、清康、広忠、家康となり、それは正しいようである。

源の末は平の松はやし

と川柳に詠まれ、親氏が「松平」を称えたのであるが、義季が、上野国新田郡徳川邑を領していたので、家康が「徳川」と称したのである。また「御家記」には、清康も広忠も、織田家とのいきさつで殺されたと書いてある。則ち

「御祖父清康は、阿部大藏子弥七郎と云者父尾張織田家へ内通の風聞の難説の有を心にかける折節、清康公、既に被成御坐、弥七郎、御腰物持ち居たる折節、馬放れ騒動するを、弥七郎は父を成敗かと思ひ、持たる村正の御腰物にて、清康を切殺奉る。御近所に植村新六（後出羽守）弥七郎を切殺す。此時清康十八歳或十七歳。武功の大將故他国迄もおしみ奉る。」

「広忠卿（清康御子）の伯父桜井内膳と云人有り。広忠卿若年の御名竹千代殿と申奉る。駿河国に御坐候節、岡崎の城へ入取、竹千代殿流浪の身となり給ふ。大久保新八郎同弟弥八郎、八国甚介、大原左近衛門、林藤八（説藤四郎）と云者岡崎に残し越、新八郎には、内膳に逆心有間敷誓紙を、伊賀八幡宝前にて三度迄為致、心易被召仕。内膳、吉良と戦、大浜迄出陣の刻、大藏とて内膳甥に相談致し、右残し者共方便致し竹千代殿岡崎へ御入内、内膳家来、城の堀を乗越逃出、或被切殺、内膳も降参、松平遠江守先祖也。

其後竹千代殿御成長、号広忠、三州を治被成、東海道の名将と申信長の親父、織田備後守信秀聞伝、何とぞ竹千代殿を可殺と謀を被廻る。広忠其頃弓を好み給ふ。備後守家来賀多目八弥と云者、尾張に隠れなき弓の上手也。某を被遺れて、広忠を可射殺とて浪人と成、岡崎へ来り奉公を望、弓の上手たるによりて、後には御側近く被召寄。弓御覽被成時、竹千代殿自身、弓を張せ給ふに、折節御側に誰も無之時、八弥走懸り切伏、城外へ出るを、十二、三斗成御小性声をたて、如此と走廻ると云へ共、さして聞付る者も無之、此度も植村新六寝番にて、上留とて橋中に行逢、八弥は水練名人、橋の上より堀へ飛込む、新六も名人にて、続いて飛入水中にて八弥を突殺す」とある。

清康が流浪して、信州林の郷の領主林光政に身を寄せ世を忍んで居た時、正月元日に光政は近郊に猟し兔を獲た。それを料理して吸物にして清康に供した。不思議にも其時からとんとん拍子に祥運が開けて、清康は三河の国主、岡崎城主となったと伝えられている。それでこれを永久に記念するため、家康が江戸へ入城してから毎年元旦には、徳川氏がは兔の吸物を嘉例としたのである。その兔は昔の林光政の後裔、上総貝淵の城主林播磨守が、毎年十二月に献上するのが例であった。

これは川柳にも作られ

年毎に卯の朔日の御吉例

林の中で押へたを御献上

天が下ついにしめこのお吸物

（安九鶴一）

（四一）

（六五）

（八〇）

（二四〇）

（二六）

（一六）

（一六）

（一六）

（一六）

（一六）

（一六）

（一六）

（一六）

（一六）

（一六）

（一六）

（一六）

（一六）

（一六）

（一六）

（一六）

（一六）

（一六）

（一六）

（一六）

是まさに凡人の見る夢でなし
日の下の人を御寝間でごろんじやり
(五九二)

夢の世に是にますてふ夢はなし
是を仰げば弥高き御夢也
(六三九)
(六九三)

五夢の外は全くの御天徳
日の下の人夢の御家御手に入
(七一九)
(八九九)
(五六二五)

栄華より蝶より是はよいお夢
是正に天が下知るお夢也
(三八二五)
(三九六)
日の下の人も寝覺のいいお夢
(五二二)
日の下の人をあつめし御吉夢
(四〇一)
是ばかりなかなかな獺の齒もたたず
(八七二九)
— 獺は夢を食う —
天地人そなはりたまうお夢也
(三三二六)

天是を大將軍へ御与へ
是天のなすところにて御開運
(六二二)
是と申すも名將のきどくなり
(五九一)
是より日本泰平の傍し枕
(八五七)
廻りもちなしに是からよくきまり
(一二四二七)
と吉夢を詠歌している。
(七七二四)

近 詠

須坂市 高峰 柳 児

膳ならぶ音から会議だれはじめ
露出過度その上媚もわきまえる
官邸の広さへ陳情腰くだけ

大洲市 米 沢 暁 明

もう見えぬ子を見送っているも母
子を連れてケーキとコーヒーだけで出る
メキシコをふるさとした歌まつり

手 負 い

高 鷲 亜 鈍

手負いのままで余生を喘ぎ喘ぎおくる
心眼をひらけと無茶なことをいう
ボタン一つでパツと心眼ひらけたら

今治市 月 原 宵 明
髭剃りが交替をした女の手
職の無い同士釣れない糸を垂れ
暗い方向いて夜店はめしにする
和歌山市 秋 月 宏 方
旅情深しこは国鉄赤字線
あなただけに許して終る紙コップ
分校いいなホタル銭亀カブトムシ
名古屋市 長谷川 鮮 山
今日でもう最後の検査カメラ飲む

信心に凝っているながらコップ酒
電気こたつで聞き入るはや三分咲き
ふんざりがつかずソケット付けたり外したり
真ずる故に祈りもロケットも
曖昧に生くる自由は雲と空
とっておきのデルタにしじみ貝一こ
雑草になりたし自然に逆わず

もう少し結果を見たい尿検査
酌ぎかたの其の手に乗って酔った酒

今治市 長 野 文 庫

長男へやせこけた父やせた土地
太陽と空気をはめて分譲地
嘘八分実際こんなこともある

小松市 山 上 千 太 郎

食後という満足感のお茶の味
心外だなんて内心ホットいる
縄のれんこの家のおやじは明治もの

三代さまハイハイという銀の鈴ひびく
生神の異相を慕い奉るのみ
口笛に犬どこからもかえりこず

★

十一月十六日、尾道から高鷲亜鈍氏来社。
主幹ご夫妻や形水、薫風、一三夫氏らと会う
道頓堀はんちで形水、一三夫氏と第二次柳談

郭公と將軍

東野 大八

私の住んでいる家のあたりは、木曽川のも野趣に富んだ風景を持っている。木曽川がちょうどS字型にくねっていて、四六時中、奇岩、峡谷の石戸を責める水音が絶えない。向って右方が山の字そのままの山容をもつ天神山で、正面から左方へ五つ盛の小さい稜線をつくって低くなっている。その山すそは竹林の堤が上流二キロにおよんで続いている。私の書斎は二階なので、もはやこうした風景も眼にタコのできる風景になりおうせているわけだが、四季折々に、雨雪朝暮の趣きにはっと見惚れることがある。雨期に入ると、天神山は水しぶきで水墨さながら、遠雷でもその雲間にひそむと、いんいんたる音響が赤松の山ひだに木魂して、まるで蘆山作戦の折の、蘆山の淡彩カラーの一幅を再現してくれる。

秋の収穫期がくると、川向うの藪から何千

何百の雀どもが、がやがやわやわやとしやべりちらしながら川を越えて、穀倉のこちら側めざして群をなして押しよせてくる。終戦末期に鄭州の野戦病院の処から眺めた、米空軍の戦爆連合の日本向けの大編隊をつくりとも思う。一むかし前、地元の農協が夜間、この藪中を急襲してカスミ網を張り、仏曉とともに猟友会が一斉に空砲をぶっ放して雀を追い込み、トラック一台分の獲物を稼いだことがある。そのおすそわけをメリケン袋に入れ、岐阜の屋台店まで運んだことである。

「満州の雀は、零下何度という気温になると、煙突の中で寝る。そこで上にフタをして下から火をたくと、その火の上にかねて用意の鉄網にやき鳥の山盛ができる。それを屋台店で売って小料理屋を建てたおっさんがいたよ。うまくいくはず、この人は鳥取県出身で酔うと串本節がうまかった」

そんなバカな話を、すずめと引きかえの酒と料理皿を前に一席ぶった事だ。

中国の絵画は六朝時代（三／六世紀）から台頭し、隋・唐時代は空前の繁栄を誇ったものだが、このころの雀の絵は、すべて猛離の眼とくちばしを持っていた。南宋の宋汝志の雀など、鷹ともみまがう人相である。今とちがって、野鳥も山野にみち溢れ、獵人などの被害もとるに足らなかった時代だけに、燕雀とてふんだんに野性味を帯びていたものとみえる。だが、実のところ、これが中国絵画の特徴の一つでもある。

「晩秋の夜など、鷹とても高い樹上にいるだけに脚が冷える。そこで雀をとらえて、夜中それを交互ににぎりかえつつ暖をとる。かくて仏曉となれば、その雀を大空に放って決して餌食としない。この鷹の仁義は美しい」

と北京のさる中国人からきかされた。

雀のほかに、そうした鷹も私の付近には多いが、鳥もみかける。カラスは、時たましかみなくなったが、むかしはいつも川っぶちの一本松に山盛りにいたことだ。

洛陽攻畧の際、私は洛寧の図書館で、一冊の画帖をみつけ出して、それを秘蔵していた。その画帖は謡曲本みたいな和綴の粗末な銅版印刷のものだが、開くと巻頭から末尾まで全部カラスである。しかも、そのカラスた

るや、すべて生々しく活写されていて、巻頭三つ折の大集団図ときたら漆黒のカラスが天衣無縫に枯木にとろせましとひしめいている図であった。そのカラスどもはすべてギロギロした眼つきで、一羽残らず貌つきがちがうのだ。たとえば日暮の山谷の住人が集団をつくって一暴れしてやろうと企んででもいる図だ。ユーモラスに、また厳肅に、カラス、カラスの一幅はすべてが人間で、アメリカ黒人の生態をさえ肌寒くほうふつとさせられたことである。作者は劉苦禅——画歴によると洛陽近傍の貧しい鍛冶職の出身とある。彼は生涯カラスしか描かなかった。

秋口になるとモズ、キツツキが時折現われる。あるときは時期外れのコジュケイが啼く。この鳥は中国南部の生れで、むかし日本へ連れて来られて放たれたやつの子孫で「チヨットコイ」「チヨットコイ」となく。ペーソスのあるその声音は、遠い故国に残る身内の誰かを呼んでいるようだ。

「むかしはホトトギスも啼いてくれたが」と古老は懐しがる。昭和十六年の夏、南京でホトトギスをきいたことがある。時は五月で場所は中山路あたり。声音はカッコンの二声である。

——ほととぎす南京城をすじかいに
A級戦犯で死んだ板垣征四郎カッカにその由を話し、その句をみせると、江戸は山谷の

待乳山が郭公の名所だった。と其角の

——観音で耳をほらせてほととぎす

の句をあげ、そのころ付近の観音堂に、明かにきたという男がシナ服を着て、耳掃除の妙技でめしを食っていたんだと板垣さんは懐しそくに俳諧のむかしを話す。中国ではカッコンの抑揚を「割麦挿木」または「淘米下鍋」ときくそうだ。白樂天の詩にも「九江三月郭公来 らんまん一樹十八株」というのがあるが、中国人は里へくる鳥としてあまり好きではない。声も悪いしね、とは板垣さんの語りでなかなか軍人にしては風流なことを知ってござると当方感心したことだ。

郭公といえば、北京の大廟や北海でよく耳にしたことだが、石原青竜刀は、あれはセグロカッコン(背黒郭公)でね、その啼き方は「光棍好苦(コワンコンハオクウ)」で、チヨンガーはつらいねとおれは訳している、とご自慢だった。往時チヨンガーの私は、カッコンよく啼く此奴に大いに人懐っこさを覚えたことだ北京陸軍病院——といっても北京郊外の広大無比の清華大学の夏木立の外だが、そこへ北京川柳会同人が、私の見舞に打ちそろってやってきて貰ったことだが、夏草の上の打ちつけた川柳だんぎの頭上に、このカッ

ウ鳥はしきりに啼いていたのを憶い出す。俗名カッポ鳥で、日本というホトトギスとはかなり趣きの異なる俗境の鳥類のようである。

私が片手を砲火で失ったのは、南支の四月一日だったが、後送の際のある部落で、けだるい山鳩の声を遠くに、ピッピコビー、ピッピコビーと気ぜわしく、そのくせ底抜けに間抜けて明るいような声を今だに忘れないでいるが、その鳥の名は今もってわからずじまい。この声こそが、私に心の底から生きることを教えてくれた天の声だったとおもう。

×
「大陸柳人同窓会会報と住所録」(非売品)が大陸川柳作家懇話会から発行された。

何を選んでいただくかは先様におねがいして
タカシマヤの商品券を
お贈りするのにも 心に
くい贈物かと存じます

一〇〇〇円から
一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都
3店に共通です



大阪・東京・京都
なんば日本橋
四丁

高島屋

美人

北村三步選

良し悪しにつけて噂の立つ美人
身ぶり手ぶりみんな美人にした舞台
ステージの美人にウインクをまじした
美人への錯覚化粧品買わされる
切角の個性化粧が殺してる
美人だがお箸のもち方気に入らず
美人との差へともかくもケチを
絶世で無いが美人のいい愛想
買物籠まで惹きたつ人が行く
アルバムを伏せて美人の胸を病み
ぬくもりもたのし美人が空けた席
四十の美人小皺がかくされず
マネキンのこれが美人の世とは
明治人瓜ざね顔へまだ魅力
歌麿が抜け出て歩く先斗町
美しい顔できれいな嘘が言え
美人だがやつぱり虫の好かぬ人
好き嫌いミス日本にケチをつけ
キリヨウなどどうもいとは負け惜しみ
目鼻立ちいいとこばかり似て生まれ

あまりにも美しくすぎて嫁ぎおく
美人みな独身と云う顔であり
しあわせは美人でなかった娘が
髪かたち変えても美人にほど遠し
笑ったら損だと美人すまし込み
美人には反感持つてよう女史
紅一点とかげば美人という感じ
塗って塗って美人のつもり
美人の多い土地だと左遷慰める
追い越してみれば美人に程遠く
美人には弱く保険に判を押して
どんな奴待つのか憎いほど美人
美しい心が美人に仕立て上げ
参観日みんな美人の顔で来る
間違いの受話器は美人らしい声
宣伝車オトリのように美人乗せ
美人だから貰えと写真押しかける
佳

こんなのも来てる美人コンクール
目礼を交して美人同士去る
運よくも美人の前の席が空き
モンタージュ少し美人に過ぎる
隆鼻術クレオパトラになる気かや
人

美人になる苦勞空腹がまんする
地

コンテストに出てから気位が高く
天

好生 狂興 与根一 勝子 白汀 白汀 映月 素身郎 正朗 木魚 無聖 雅子 秋月 星風 白汀 正朗

美容院美人になった顔で出る 一進
軸
まんざらやないでクリームにする

急ぎ足

黄瀬美秋選

今日はやあで別れる急ぎ足
拾いもの届けるつもり急ぎ足
急ぎ足あちらも待ってるいい返事
定年退職してもなおらぬ急ぎ足
セールスマンタイムイズアップ急ぎ足
不甲斐ない叱られに行く急ぎ足
マイホーム主義に徹した急ぎ足
気のある返事仲人の急ぎ足
磨き屋の目にどれも急ぎ足
急ぎ足家までもたぬ空模様
急ぎ足何やら言って素通りし
やせっぱ性格と云う急ぎ足
急ぎ足に待ったをかけた歩道橋
何事か気になる友の急ぎ足
挨拶もそこにして急ぎ足
土砂降りへ濡れる覚悟の急ぎ足
急ぎ足して父ちゃんと合う歩調

礎山 貴恵 曉風 素身郎 保夫 里風 弘朗 魚水 宵明 利美 藤波 古心 映月 頂留子 双葉 初甫 清人

木枯へ合わした様な急ぎ足
カマキリの何思ひ出す急ぎ足
サイナラをして五六歩の急ぎ足
おデイトは友へ内証の急ぎ足
急ぎ足鼻緒の切れた胸さわぎ
急ぎ足パバ出迎える駅が見え
急ぎ足赤信号で息を入れ
玄関で怒鳴って入る急ぎ足
言い訳は聞かない顔の急ぎ足
見るからに用があるらし急ぎ足
やば用と嘘をついてる急ぎ足
逃げる足追う足そこに恋があり
滝の音きこえ団体急ぎ足
打水をさけ損うた急ぎ足
急ぎ足表に廻るいい話
急ぎ足蛙びっくり先を逃げ
看護婦が廊下を急ぐ白い風
一分を駅舎へ急ぐ足足足
雑沓を分けて尾行の急ぎ足
逢いに行くのか軽ろやかな急ぎ足
案内の若さへ老いの急ぎ足
ねんねこの首が落ちそな急ぎ足
こみ上げる嬉しさがつい急ぎ足
急ぎ足若さはねて行く姉妹
人
急ぎ足三人の子の参観日
地 鶴丸

七面山
映月
芳子
輝親
隆子
代仕男

曉明
古方
葵水
金三
章雅
公輔
十九平
輝親
千翁
軒太
喜由

運

小川 静観堂 選

社会鍋入れてからまた急ぎ足
天
急ぎ足刑事の感に突き当り
軸
吉報へつっかけ履きの急ぎ足
品 充
不運とは云わず試練と思てみる
後家運でとおし頬の骨が張り
運ですと口かず少ないインタビュ
国運へ賭けた命へ今日叙勲
運命に逆う靴の底が減り
運の尽き女二人と対決し
国運の起伏を偲ぶ百年展
幸運は花も嵐も踏み越えて
運命は皮肉とドラマ逢わさない
不運だともいふまへはそれまでよ
前走者が転んでテープを切った胸
七面山
佳
此処までの運命だった下駄が割れ
運のよい時は焼けても焼け太り
巻き尺で今日の不運が測られる
災難の隣りにあった運つかみ
茶柱へ羽田を幸運言うて発ち
運いまだつかめず飯場の虫を聞く
人生劇場また素通りになった運
人
勝運をつかんだパンチの小気味々
地
代議士の逮捕されるも運不運
天
福耳やったんかいなと耳を見直され
軸
河豚汁にやられた話だけですみ

征山
秋女
トク子
曉風
無聖
素身郎
どんたく
狂興
耕人
弘朗
宵明
輝親
緑親
透風
一治

なみ
与根一
不二
品充
旭峯
宵明
十九平
喜由
曉明
鶴丸
鶴声
一峯
みのも
佳女
十九平
里風
古方
恵二朗
勝久
古方

初歩教室

題 「言葉」

菊沢小松園

本月は投句者が多かったので句の解明は簡素にして一句でも数多く載せることにして見た。飽く迄試案だがこれも一方法だと思ふ。

年輪を見せるひとこと教えられ 瑞枝

欠点を避けた言葉の温かさ 次昭

気休めの言葉と病人疾うに知り 初甫

言葉尻とって司会者如才なし 同

言葉尻孫用捨もなく捕え 多幸

口下手が言いたいことを言いのこし 同

①詠み出しがよいし、よい句材だ、無理のない句。②思いやりの深い人間がしみ出ている。③暖かい人間味、ベッドに漂う愛情が美しい。④場慣れた司会者の姿も髣髴。⑤こま

しやくれた孫の面目躍如。⑥口下手を捕えて余すところなし中七庄巻、佳句。

やんなはれ男者如きにおだてられ 美代

あたためた言葉が胸で脈を打ち 八木千代

言葉尻濁して女打診する 同

気をつけて居るのに言葉尻取られ 頂留子

角立てぬ言葉のあやも年の功 同

①中七に気概が溢れて力強い。女性の句として線の太い佳句。②女性の繊細さがよく出て優しい上五が印象的。③女が男を計っている句、女をとすれば反対になる。一字の違いもおろそかに出来ぬ。④若い人の慨きの句。所詮年輪には勝てぬ。⑤中七がよい。生活経験の豊かさの功。

考えた通りに言葉になって出す 肖二

書く方が言うより易い胸のうち 綾女

再会に言葉もなくてただ涙 富子

本当の言葉は通訳だけが知り 天人

言訳が決まり度胸の胸を握え 吐痴男

①對手があること、兎角世の中計画通りには行かず。②世間の常体と反対の処に川柳が生れた。③普通のことを尋常に纏めただけでは何の感興も起らぬ道理。④本当の言葉の味は通訳だけと皮肉が利いた。⑤居直り型が面白い。

花言葉は知らぬが奇麗なので贈り 秋月

いらいらとさせる男の京言葉 利美

とつときの言葉がとける芽出度い日 露声

役人の言葉は右とも左とも すき

言葉尻とらえて悔がまだ残り 英詩

録音の言葉で無事にバスを降り 信天翁

①花の生命は美しさ。敢て花言葉など知らんが奇麗なので力強い男の句。②そう云った感じであるが、句想は浅い。③もう一捻りが

若本多久志川柳句集

「老いの坂」

柳歴四十数年の著者が世に問う巨篇。

序文、中島生々庵主幹。 B 6 版美本

実費四五〇円 送料七〇円

★ 若本多久志著・川柳句集

「親ごころ・子心」

実費二〇〇円 送料六五円

申込所 大阪市南区鰻谷仲之町二〇

川柳塔社あて

ほしい。④役人の狡智にちよびり触れた。⑤自己の非に反省があるところに救われる。⑥ワンマンカー、車掌の代りのテープの声に降りる、時代の一端を確かに突いている。

謎かけた言葉通ぜぬもどかしさ 正朗

言葉から故郷へ捜査の手が伸びる 同

真実に触れた言葉を温める 芳子

はなむけの言葉よき妻よき母に 同

言訳の言葉練りつつべを押す みさを

①神経の繊細さがこの句を生んだ、相手の静とこちらの動との対照が面白い。②放送用の捕物控を見るようで浅い。③温められた言葉は何時までも血となり肉となろう下五がいい。④これは同巧言葉を内容化しただけ。⑤言訳と言葉は重複避けること、言訳と言えは言葉はいらぬ、言訳が決ってべに入力何気なく吐いた言葉で寝就かれず 秋女

お人柄言葉のはしに迄にじみ
聞き取れぬ言葉へ合槌打っておき
玉音に感涙したも過去のこと
判つて顔して新語また忘れ
京言葉背のびをして聞いている

同 鉄舟
弘美
葵水
徹也

①一と言多かっただけに女らしい句。②上品過ぎて微温湯の感はする。③判らぬ儘に合槌を打つ狹い句ながら世智は突いている。④敗戦の日の玉音放送のこと、玉音という語も過去の死語になった。⑤カタカナの新語は殊に覚え難い老生の一面は出ている。⑥間伸びの京言葉の雅音を背のびとは適切な表現を得た。

いろいろの言葉覚えさせられている税吏

静観堂
竜天
陸夫
言葉などいま入りません二人
みことばの通りになって国平和
行届く言葉で催促ことわられ

静子
狂興
同じことを相手によって言い変える

①それ程税務署というものは各層の陳情が多いと言うことか。②若い二人燃えて居る同士では言葉などもう廻りぐどいのだろう。③敗戦の詔勅手を上げたのちは絶対平和か。④相手は女それも美しかったらなおの事、上手な言訳にあつて退陣か。⑤同じ言葉も相手

次第次第急強弱、処世の手段。
青い目の方が正しい日本語
つき出されたマイクへ言葉うつるなる

万竿
同

席ゆずる言葉にさえも上手下手
惜るための言葉使いは行とどき
丁寧な言葉になって揉めつづけ
比呂路

①戦後の日本語の乱れを突いた敏智が嬉しい。はつきりした句。②マイク慣れせぬ人の様子も窺えて面白い。③下五で一句が光る。佳句。④必要に迫られた努力は偉大、演出も行届く。⑤採めるほど言葉も丁寧になる。この輩は性が悪いじわじわ長引く。

ライバルと辯う言葉に含む棘
言葉尻とらえる癖に親めず
同 軒太楼

国訛り言葉の意味が解りかね
大工千代
言葉尻聞きとがめてる年の功
破天

一言葉を返えしますかと負けていず
誓二
①一見よい様に見えて何か引つかかるものがある。ライバル競う棘、これでもかこれでもか、一寸追い過ぎた感じ。②これはもう一捻りはしい、この儘では説明に終る。③これも国訛りの説明の感じで平凡に終った。④これは下五で救われた好例。⑤これも下五に重点をおいて情景をはつきりさせた。

言葉にも文にもせず君は去り
茂美
運と言う言葉身にしむ更年期
一治
傷心の親を慰む語に困まり
綾子

取ったときの言葉で始まるPTA
保夫
大阪の言葉で行けと赴任させ
同

①此の種の人が一番手強い、これより後は否として声なし。②人生の盛りも過ぎて世渡

りも更年期頃ともなれば精進努力以外の大きな力を感じる。③孝心な子の真面目な心配、声のない言葉を親は疾く知っている。④齒の浮くような言葉を冷たく見ている世間の眼は鋭い。⑤励ましの言葉も暖かい人情に触れる上司の思いやりが好い句を生んだ。

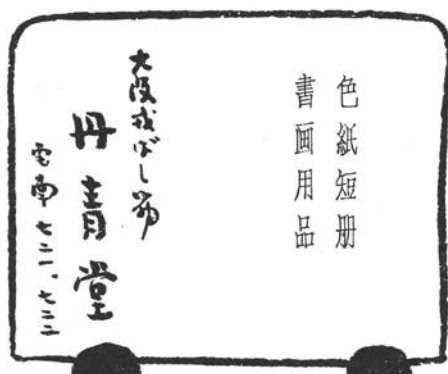
行き届く言葉嬉しく疲れ切り
選者吟
言葉にはならず涙で縫りつき
同

十二月二十日締切 四十四年二月発表。
題「蒸 発」

宛 先

大阪市阿倍野区王子町四丁目二番三二号

菊沢小松園



第二百九回(復活第十四回)

大 萬 川 柳

「不良」

入選発表

選者 清水白柳
 投句総数 五百四十六句
 入選 五十三句

藤井寺 吸江 友達の不良をなじる子信じ
 倉吉 弘朗 怒らねばならず叱ればぐれてくる
 倉敷 素身郎 倦怠期工場で不良品を出し
 大阪弓彦 メーカーを強調してる不良品
 尼崎 慶彦 母の眼に不良とつうのシャツの色
 大阪 痴亭 長髪はみんな不良に見える老い
 高石 好郎 集金どころか苦情ばかり聞き
 大阪 生良 ゴーゴーを不良と見える年のずれ
 守口 笑風 サン格拉斯互に不良かと思ひ
 鳥根 正朗 明治には不良と見えるサン格拉斯
 岡山 十九平

不良児が可愛ゆてなるママボリス
 島根 芳子 セット入りすれば凄味のある不良
 岡山 秋月 髪型で祖母は不良にしたい
 橋本 木魚 親と子の定義がちがう不良なり
 大阪 滋雀 不良品一つキャンセル仄めかし
 堺 象園 幾分は不良の女でおもしろし
 島根 日満 サン格拉斯うちの子でさえ不良
 大阪 富士 ばた餅の不出来をそばで待つ子
 大阪 水客 合鍵のきげんの悪い日と思う
 大阪 美房 棍棒を振るより不良の子がまし
 同 不良にもなれずさりとて出世せず

大阪 柳宏子 不良とは云わず不憫な子とかはい
 同 成人向きなどと不良化けしかける
 宝塚 ゆきを こんなとチャック不良になるな
 同 不良とは自働扉もだらしな
 門真 鉄児 不良曰く家庭が僕をこうさせた
 同 手強いと見たか不良の捨てせりふ
 八代 史朗 機械なら部品替えたい更年期
 同 ガタが来たテレビ叩けば又写り
 高槻 静馬 ほんとうの不良は少年院に居ず
 同 集金は出来ず不良返品ことずかり
 大阪 柳志 横文字に惚れてつかんだ不良品
 同 悪書追放してからひまな貸本屋
 和歌山 葵水 不良にもなれず小さくなって生き
 同 不良品同士平和な夫婦仲
 大阪 洛醉 スピーカーの不良一ぺん叩いてみ
 同

大穴の予想本日馬場不良
 米子 千代 子の友がみんな不良のように見え
 同 子と同じ歳補導にも熱が入り
 松江 与根一 声がわりして口答え不良じみ
 同 ほんとうの恋は不良の眼をさまし
 笠岡 要次 ひと声で値引き不良が案じられ
 同 不良ではが真赤なシャツが好き
 鳥取 忠志 手を焼いた不良が出世の旗頭

営業所
 阿倍野店
 堺店
 住吉店
 平野店
 都島店
 今福店
 十三店
 九条店
 credit system
 丸越
 月賦百貨店 本社
 大阪市阿倍野区帝塚山1-1-21
 電話-623-1151~3

片親の不満が不良へ結びつき
同 住

カウンセラーの処方^は返^こら不良
豊 中 古 方

うれしさは補導の子から来た賀状
藤井寺 吸 江

愛情が裏目うらめに出て不良
倉 吉 弘 朗

父親の方は覚えがある不良
倉 敷 素身郎

何処へでも嫁くわと不良^もて見せ
米子 勝 久

不良だと他人が云えば腹が立ち
高 石 好 郎

話題また不良の頃にさかのぼり
和歌山 虎 城

ぐれて来た子に継がせ^た田を守る
天ノ句 米子 千代

自 句

整調不良監督が手をあげる

大萬ベストテン(十一月現在)

(同点の場合は投句先着順)

一 素身郎 二六、五 倉 敷

二 柳 志 二六、〇 大 阪

三 好 郎 二五、五 高 石

四 文 秋 二三、〇 大 阪

五	千代	二三、〇	米子
六	水客	二〇、五	大 阪
七	吸江	二〇、五	藤井寺
八	静馬	一九、五	高 槻
九	美房	一九、〇	大 阪
十	ゆき	一八、〇	宝 塚
十一	鉄児	一六、〇	門 真
十二	十九平	一六、〇	岡 山
十三	弓彦	一六、〇	大 阪
十四	一舟	一五、五	笠 岡
十五	要次	一五、五	尼 崎
十六	慶彦	一五、〇	鳥 取
十七	日満	一四、〇	岸和田
十八	きさ子	一三、〇	岡 山
十九	久米雄	一二、五	堺
二十	草 春	一二、〇	倉 敷
二十一	小路	一二、〇	倉 敷
二十二	千 翁	一一、〇	倉 敷
二十三	梁 水	一一、〇	倉 敷
二十四	清 人	一一、〇	大 阪
二十五	滋 雀	一一、〇	大 阪

(以下略)

昭和四十四年度第一回
「人違い」 五句以内

締切 十二月二十日

昭和四十四年度第二回
「重役」 五句以内

締切 一月二十日

大萬川柳会の会則

一、本会は川柳に興味を持たれる全国の同好者に広く呼びかけ、その技その覇を競い柳界の向上発展と柳人相互の親睦を図るを目的とす。

二、毎月の出題並びに選は清水白柳氏が担当され、投句は一人五句以内、用紙は官製ハガキ。選句は公平を期して到着順に一句毎に句箋に清記し、無記名のまま一連番号を附記して選句する

三、毎月二十日締切、出題及び入選発表は毎月の川柳塔誌上に掲載される。

四、左記の採点法により月々の得点を加算し、順位を定め、毎月のベストテンを発表する。

天位 四点。地位 三点。

人位 二点。佳句一・五点。

平抜き 一点。

五、毎年十二月締切分から翌十一月締切分までを一年度として年度間の総合点の成績に依り順位を定め、年度ベストテン把持者に賞品を贈呈し、大会の選者に推薦、懇親宴に招待す。ベスト

テン第一位には特に梅里賞をもつて表彰する。

六、本会の大会は毎年二月に開催

する。

本会の会費及び投句料は不要。但し大会の会費等は別に定む。

七、投句その他に就いての連絡先は

大阪府高石市高師浜

三丁目五十六

郵便番号 五九二

川村好郎宛

電話 堺 六一六二

▼大会のご案内は次号で発表します。

★

川上三太郎先生が十月十六日たおれられ、以後は面会謝絶の状態とのこと。ご全快を祈ります。



☆ 柳 界 展 望 ☆



大陸柳人同窓会・奈良いかるが荘で。
左から石原青竜刀・清水白柳・高木夢二郎の諸氏。
岡橋宣介氏撮影。

(橘 高 薫 風 担 当)

▼青森市制七十周年記念川柳大会は十月二十七日(日)午前十時から青森市役所会議室で開催。同人工藤安亭氏が兼題「暮」の選を担当された。同氏はまた、十一月三日の第五回青森県下川柳大会(五所川原市)でも席題の選をされた。

▼森田茗人句碑建立記念川柳大会は、同氏担当の日本海新聞柳壇開設十周年記念を兼ねて、十一月二十三日午前九時半から倉吉市新町

三丁目誓願寺で。

▼木幡村雲句碑建立記念川柳大会は昭和四十四年四月六日(日)午前十時から大東市野崎町、慈眼寺客殿(野崎観音)で開催。兼題Ⅱ人間味・小さい・駅・道・観音。会員三百円(昼食発表誌呈)。

▼札幌市民文化祭川柳大会は十一月二十二日(金)午後六時から札幌市北三条西七丁目婦人会館で。

▼新庁舎竣工記念並びに第

十二回西区民川柳大会は十月二十七日正午から名古屋市西区役所会議室で開催。

▼笠岡市第二回川柳大会の成績は、二位本田恵二朗、三位小幡里風、五位直原七面山、七位浜田久米雄、九位木山要次、十位松本忠三の諸氏が入賞。

▼第十一回近県川柳市制十周年記念大会(竹原市)の成績は、四位林野甕光、八位小幡里風、十二位森井青居、十七位藤原秋月、十八位月原宵明の諸氏が獲得。

▼布部幸男氏(京都市)は十月一日京都第一赤十字病院で胃癌のため死去。六十七才。川柳歴五十年のほか冠句、情歌、落語など多趣味にわたり、生前の路郎先生とも親交があった。謹悼

▼川柳ノート四号が十一月一日京都市右京区上桂宮の後町三九岩村憲治方川柳ノートに於いて発行になった。創刊号以来充実を重ねて、作品・句評・座談など興味深い内容となってきた。更に発展充実を期待する。

▼川柳瓦版のよみうり川柳賞八月の秀句のうち「土砂降りを集めて悲し飛驒の川」の作品があるが、芭蕉の句の「五月雨を集めてはよし最上川」の語呂合わせになってしまっている。追悼の句として気品と格調が高いと選評にあるが、如何かなものであろうか。

▼富田林市民文化祭参加川柳句会は富田林市、富田林市教育委員会、富田林市文化連盟主催で十一月三日午後一時から富田林市よろず相談所で開催。盛会裡に年間優秀句に市長杯の授与あり、藤岡花梢さんの激励の和やかな一こまもあった由

▼備前川柳社十月句会は楡原竜泉一周忌句会を兼ねて十二日万女居で開催。

▼第十五回岡鉄倶楽部文化部川柳大会は十月十九日岡鉄クラブで。

▼富士野鞍馬氏(東京都)は東京都港区芝白金三光町二七三に転居された。

▼服部十九平氏(本社参事)は十月十七日から沖縄戦跡巡拝団を引率して渡縄、途

中台風のため期間延長十月二十三日帰岡された。主席の公選で内地からも与野党の領袖が次々と、行っていました。鳥民の間では与野党の感覚が内地とは事情が大いに違っているようでした。

▼本田恵二朗氏(本社参事)から「句集『砂の足跡』」五百部刷った、あれよあれよのうちに払出してしまいが大慌てで三百部増刷中で

はげめ・かぶれぬ白髪染

男まえ理容

環状線寺田町裏駅南一丁

す。一般社会人の方が百五十部も買って下さったのでうれしい悲鳴をあげることになったのです。三太郎、紋太両大御所をはじめ諸兄姉より温いお言葉が舞い込んで仕合わせをしみじみ味わっています。」

十三日に帰郷された。

▼越智一水氏（今治同人）

は十月二十日山口湯田山口県婦人会館で開催された第十回全国郵政川柳大会に出席、出席者百十名、投句者二百名の盛会で柳の芽は年々のびて行きますが、今年も理事に選任されました。当日の成績は七位であった。

▼八木摩太郎氏（本社参事）は十月二十一日反戦デモ行進の大阪駅を発って、宮島平和公園・秋芳洞を見物、山口湯田温泉に足を伸ばし丁度明治百年の記念日の二十四日から「うろうろしてこんな

▼永田六竜子氏（大阪市）

新同人紹介

谷垣史好

—好郎・白柳推薦

加藤貞山

—白柳・好郎推薦

高杉鬼遊

—好郎・白柳推薦

処で過しております」と下呂温泉別館ふじやから。「チャンネルを廻して湯宿のひろしじま」

▼藤原秋月氏（岡山同人）

は十月十三日福山の備後川柳大会に出席、天気も好く秋を満喫して「いにしへの声がしそうな天守閣」の句信を寄せられた。

▼高杉鬼遊氏（八尾同人）

は十月二十七日金沢の北陸川柳大会に出席された。金沢には先祖の墓があり墓参を兼ねて行かれたのだが、初めて外の句会に出席しているいろいろな面で大変勉強になった。

▼渡辺曉童氏（愛媛同人）

は十月二十八日来社。

▼河村日満氏（本社参事）

は十月七日来社。主幹と歓談。

▼福田丁路氏（高槻同人）

はご夫妻と奥州旅行。中尊寺を中心に鳴子温泉から句信一拝むのを忘れ見とれる金色堂丁路。

▼中筋三幸氏（和歌山同人）

の夫人三生子さんが十月十一日喉頭炎手術のため浜外

科病院（本社同人浜光治院長）に入院。一日も早いご全快を祈ります。

▼島田兼孝氏（大洲市）は

藍綬褒章を受章された。大洲裁判所では始めてのことと柳人諸氏からも多数の祝電で感謝された由、皇居北の間で両陛下の賜謁をたまり、路郎先生がご存命なら一番によろこんでいたでけるものと、主幹あてに「藍綬章明治の腰がピンと伸び」。

▼清水白柳氏（本社理事）

が不二田一三夫氏執筆のラジオ大阪「十一月五日・秋の七草奥様コーナー」を聞かれ、あれだけよく調べたものを聞き直す時間のないのが惜しいと激励文を寄せられた。（毎朝九時三十五分から十五分間、毎月一日から十日までが氏の担当「日曜日を除く」）

▼藤村涼子さん（在ニューヨーク）が薫風と共に来社

主幹ご夫妻と編集部の一三夫氏と柳談から日米の夫婦のあり方から子弟の教育にまで話がはずんだ。

▼石倉旅風氏（大阪同人）

夫人が十月五日逝去—法名浄行院妙道日静信女、六六歳。一寂しけりや迎えに來いよと鉦叩く—旅風。哀悼▼関西電力発行の機関誌「ひらけゆく電気」の「歳末の川柳」座談会に、十一月十九日生々庵主幹と不二田一三夫氏と山川阿茶女史がキタのはつ根へ出席されたなお同誌には北川春果医博や一三夫氏がずいひつを執筆されていた。



△
タケダ

⑭

疲労
肩こり
神経痛
食欲不振

アリナミンA

本社十一月句会

会場 天性寺

六日 午後六時

寒くなく暑くなく、こういう日の句会が一番気になるのが出足である。毎月新しい方のご出席があるのに予定数を割ることがある。戸田古方氏の柳話は、中国を主にした興味深い塔のあれこれである。絵入りの解説で大好評だった。丹念に描かれた二十数枚の塔が素晴らしい。

月間賞は前原一智さんが獲得された。初出席でこの金星である。ここに句会のためのしがある。九時閉会。

(河井庸佑整理)

出席 与呂志・古方・生々庵・花梢・瓢太・双楽・滋雀・貞山・柳志・言也・葛城・一三夫・村雲・敬太・静馬・県吉郎・はきだめ・摩太郎・弓彦・鶴声・金三・文秋・万の・形水・一扇・多久志・柳宏子・千梢・つき子・誓二・一智・肖二・狂二・綾女・史好・吸江・凡吉・静歩・トメ子・いさむ・笑巳代・鬼遊・日出雄・薫風・一舟・功雄・庸佑・舟遊・弥生・季賛・葉子

席題「無口」

八木摩太郎選

人柄を無口に見せた借り上手 生々庵
ささやかな抗議無口の妻になり 柳志
腹見せぬ無口が恋をとり逃がし 凡吉
無口な子内弁慶で手に負えず 鶴声
無口では居れぬ濡れ衣かぶせられ 鶴声
どもるから無口で通すしおらしき 文秋
よくしゃべる奴だと無口笑うだけ トメ子
無口者一番先に結婚し 言也
失恋がこんな無口にしてしまい 言也
飲んでから無口少々角がとれ いさむ
末っ子の無口が一番親おもい 一三夫
バスの中隣り無口で肩がこり 葛城
濡れ衣へ無口真赤に怒り出し 柳宏子
どたん場になって無口がしゃや出し 葛城
見合の座無口になって居れぬ妻 日出雄
どもりとも知らず無口をほめそやし 狂二
無口だが飲む世話だけは引受ける 吸江
無口だがたまにしゃべると失言し 一三夫
よっぱだの思いか無口訥弁す 葛城
事金になると無口もしやべり出し 柳志
キャバレーで無口の方がもてている 金三
無口だと愛情までも疑われ 綾女
酔うほどに無口うるさいしやべり 言也
誘い水かけたら無口よくしゃべり 文秋
禁酒したおやじ無口に輪が左回り 静馬
一枚の紙が無口にした左廻り 花梢
聞かずに無口に聞いて無口の生返事 いさむ
時たまに無口が言えどギツ過ぎ 摩太郎

席題「糸」

木幡村雲選

ボタンつける男の糸が長すぎる 花梢
執念をこまめに編んだレース糸 滋雀
振袖のしつけ糸とる目出度い日 静馬
三の糸切れて不吉な予感あり 肖二
胎動に一息入れる毛糸針 花梢
しつけ糸まるめて育つ子を見上げ 万の
絹糸のもつれにも似た倦怠期 万の
宿命の糸があやつるふしあわせ 静歩
目に見えぬ糸がからんでいる 舟遊
蜘蛛の糸向うに寺の屋根が暮れ 舟遊
糸を張るくもを見つめる失業者 万的
糸を張るくもを見つめる失業者 狂二
千羽鶴願いをこめて通す糸 滋雀
重役が変り出世の糸がきれ 鬼遊
編み直す毛糸胎動かすかなる 多志
糸切り歯見せて結んだ端を切り 葛城
糸の力せ巻き取る妻におどられ 柳志
小言聞き流す毛糸を編みつつ 柳志
あやつり人形口も一役して 金三
入歯では糸が切れない糸切歯 文秋
糸巻きがつかえて聞かぬ小抽だし 金三
風の糸切れてはかない恋だった 舟遊
タテ糸の銀がかがやく織女星 古方
そのバックには大物が糸を引き 村雲

席題「電算機」

橋本言也選

事業不振ほりてをかぶる電算機 県吉郎
労組が反対している電算機 いさむ
電算機使える人を追い使い 県吉郎
儲うける決算と出た電算機 いさむ
コンピューターに自分をかけるわび 与呂志
電算機時代に盤く指しかと 日出雄

サファイアの指素直なコンピュータ電算機ピアノ打つ手と思われず電算機社の発展へタクト振るコンピュータだが川柳は作れまい釘一コンピュータへ血が通う人がいて人がうごかす電算機増資増配いざなぎ景気の電算機コンピュータも使い八卦も見も恋の手引きまではご免と電算機愛情を確かめると電算機電算機恋の相手も見つて出しエリートが真つ先き覓えた電算機電算機通りに株価ついて来ず電算機に怠ける尻をたしかめるコンピュータ算盤塾にうらまれる電算機十年先の地図を見せ電算機の程お客来てくられず電算機の音人間を笑うよう電算機いよいよ月へと歩を進め落選をコンピュータがはじき出し脳味噌と競べて見たい電算機電算機しもたボタンを押し違えず電算機不馴れで威力発揮せず電算機社長泣きで弾き出し北浜の明日は分らぬ電算機大臣を調べて見たい電算機コンピュータ嘘はなかつ社の赤字一分と待たず答えるコンピュータ

言柳 吉 静 双 古 葛 柳 誓 葛 一 形 静 柳 万 金 三 柳 生 静 花 古 村 多 千 摩 花
也 志 郎 水 馬 築 方 城 志 二 城 舟 水 馬 志 的 三 子 々 庵 馬 梢 方 雲 久 梢 天 郎 梢

タレントへ反省うながす票が寄り
タレントのオホ私はまだたまご
人格を無視しタレント運ばれる
スランブのタレント捨身のハブニング
タレントの多忙自分をみ失ひ
タレントのまじめな話も記事になり
遠かったタレントへの道ふりかえる
タレント議員やっぱり舞台忘れかね
チョイ役がついてタレント気取り
離婚してタレントさらに人気あげ
自己陶醉もうタレントの芸でなし
タレントの演技まねけた口をあけ
タレントの今日はかつらをける演技
タレントの脱線四面楚歌の秋
ギョコチないタレント莫子コマシーヤ
タレントも泣かず飛ばずでいる議場
タレントはギャラのもつれで殺さ
泡となり星となる日のタレントよ
タレントに太陽があるロケ続く
タレントの夜は銀河をふりむかず

静白静芙静万一言摩誓芳柳飄鬼庸滋一白日礎
步柳步步巳代馬的匆也郎二子太遊佑雀匆柳滿山

兼題「違反」

本多柳志選

欲ばって積載量で割せられ
違反して儲け勲章まで貰い
公開取締り小のマダムも気をつか
大物が違反ばかり切抜ける
デートの約束違反同士が手を握り
違反やと言えは顧問料と笑い消し
違反にはならぬ学生と赤ん坊
違反ではおまへんやろかきのこ雲
ダンパー違反も積んでいる響

あいき 正朗 芳子 磯山 八郎 まさひろ 野迷路 日満 葵水

焼けるまでまかり通った違反ビル
 ザル法となめて違反に引掛かり
 よく聞けばばろい儲けにある違反
 人生は違反ストレスで勝ち残り
 法律を替えても違反にはならず
 交通違反非番の私服目をそらし
 違反車を追うハイヤーを追う白バイ
 圧力がかかり違反のもみ消され
 ボールペン違反の主へせきたてる
 かつこい車違反がよく目立ち
 選挙違反あつさり認め恩赦待ち
 大赦には選挙違反者胸をなで
 葉巻街へも違反が待つ恩赦
 金バッジ違反の数が箔をつけ
 議員バッジ胸に違反がそり返えり
 違反したポーズは見せぬ金バッジ
 堂々と紳士の仮面きて違反
 選挙違反小物の方が騒がれる
 白バイがスリル楽しむように追ひ
 ウィンクをしたら違反かるく済み
 違反一つようぜず候補また落ちる
 小便無用立札のとこいつもぬれ
 選挙違反大きな網に雑魚ばかり

章雅
 一彦
 舟遊
 吸江
 凡吉
 滋雀
 静歩
 文秋
 静馬
 双楽
 狂二
 一夫
 肖二
 言也
 吸江
 文秋
 弥生
 一夫
 綾女
 県吉郎

直原玉青著

創元社出版

「新しい南画と

俳画の描き方』

本社でも取次ぎいたします。

兼題「タレント」

槌口舟遊選

タレントの目に国会を何と見た 正 朗

人生を回り道して無事故です
ウインクの青へ違反の気のあせり
パトカーで逃げた違反を言いふらし
禁札の下にやっぱり坂の山
違反者をあげてポリスは出世をし
小走りで小さい違反を通り抜け
ドライバの違反話に花が咲き
手ぐすねをひいて違反を待ちかまえ
俺だけがいつも違反を見つけられ
七光り及ばぬ違反してしまい
銃声へポリスも走る禁猟区
柳志

兼題「古本」

金井文秋選

供給と需要古本とも言えず
手放した古本高値でめぐり合い
古本を器用に探す秘書を持ち
元々は趣味で始めた古本屋
兄ちゃんの教科書で納得させられる
古本を買って二三日日に晒し
古本屋ほんとたたいて出してくれ
蔵書印チラチラ見ながら値踏みされ
古本の値打ちを知った即売会
古本も回し読みして快復期
思い出もかなし遺品の愛蔵書
荒縄で括られ本も落ちぶれる
屑屋には蔵書も貫で買うねうち
古本の値打ち表紙につきを当て
ダンピングの新刊を積む古本屋
漢籍の古本親父の偉らさ知る
絶版と知り古本の値段変え
美しい絵だけ見て置く草草紙

日満 虎城 与呂志 章雅 滋雀 葛城 庸佑 柳宏子 鶴声 芙巳代 美久志 形水 鬼遊 村雲 久志 形水 多志 肖二 綾女

12月の句会

玉造川柳会（大阪市）
十二月十日（火）
午後六時
焚火・無意識・大晦日
玉造交差点南一〇〇米
大阪信用金庫

南海川柳会
十九日（木）午後六時
小人・ちぐはぐ・基礎
ナンバ高架下
親和クラブ

南大阪川柳会
十二月二十日（金）
午後六時
残業・苦勞・ライバル・添える
北生野町一丁目五乗願
寺国分町東三〇〇米文
秋居近く

兼題「浮気」

若本多久志選

読みもせぬ本応接で古うなり
珍本の内報本屋の常得意
ぼろぼろの辞典へ執着まだ残り
古本も古典となれば巾きかせ
古本だけの財産置すり切れる
古本の中に明治の生きる道
古本に江戸華やかな日を偲ぶ
古本のしまつ置場所替えただけ
古本屋のカン落丁を見逃がさず
古本屋買うまで埃のせておき
古本屋アイロンかけて値を交える
古本を売って落目は息をつぎ
この本に闘志燃やした頃もあり
蔵書印わびしく古書にめぐりあい
こんな本くす屋に払う人がある

一舟 村雲 滋雀 双案 千梢 静歩 言也 花梢 金三 葵水 鶴声 いさむ 瓢太 一知 文秋

浮気でもしたいとマダム荒れている
夢で見た浮気ねざめの気がとがめ
アリバイはちゃんときずれても浮気
浮気してもにくまれぬ徳を持ち
虫のよい合い縁機縁という浮気
浮気より女房泣かす梯子酒
六十の浮気はたかがしれたもの
浮気は昔曾孫出来てもまだやまず
浮気とは別の一夜を湯で明かし
朝がえり女は向をかえて食べ
豪勢なみやげ浮気の匂いする
弁解をせぬは浮気でない証拠
おたがいに浮気にふれずいる夫婦
妻は妻ほかの女は女なり
戻ろうか行こうか浮気の虫さわれ
裏反る肌着で浮気見つけられ
かもしれぬ浮気受話器をひったくり
浮気して朝の冷気を背に感じ
孫のある同士の浮気も旅のこと
やがて又直る浮気とはって置き
浮気より刺激の欲しい倦怠期
浮気した蝶ネクタイが首を締め

章雅 吉太郎 村雲 千梢 一知 狂二 吸馬 葛城 夢太郎 美代 生々庵 庸佑 瓢太 弥生 臯君 日出雄 花梢 形水 綾女 静歩

浮氣した父を知らない子を育て
浮氣には対手がいると笑つとく
よろめきのドラマの話し熱がいり
女房に病氣移して浮氣ばれ
浮氣まだ止まず職場を又変り
浮氣とも知らず女は燃え上り
移り氣をよそへ外らさぬホームバー
親切がすぎて深入りした浮氣
計算に入れた浮氣の白い肌
千梢

逢いにゆく靴を磨いてくれる妻
満ち足りてよろめく術を覚えだし
もつとも二号浮氣に味方する
人妻はドラマのように浮氣せず
浮氣への心せわし夕化粧
無抵抗の夫浮氣をやつていた
小さな誘惑期待して出る宿の下駄
中風になつて浮氣もそれっきり
バスの車掌を眼で撫でるのも浮氣
白芳子
柳

他所の花皆美しく手折りたし
まむし食うてまで二号と続ける氣
衿足が魔物のように目にうつり
うぐいすの浮氣となりの梅を恋い
そのうちに浮氣する氣でいる養子
浮氣ではないと浮氣の手を握り
死ぬまでにドカンと浮氣してみたし
多久志

瓢太 葛城 一 静馬 葵水

石原青竜刀著

諷詩「龍沙吟」

▼諷詩「龍沙吟」が一九六八年十一月七日東京都大田区西蒲田六の一七の二二・三元社から発行になった。沙人集(俳句)青竜刀集(

川柳)私俳句矢沢川寿橋(夫人を交通事故で亡くされた悲傷の詠嘆)附録大陸風物吟、龍沙句帖などから成る。自序に「多年俳句と川柳をやつてきた結論として、それらは将来に本になるべきものと考え、そのあかつきにけるジャンル名を著者現在の思考力から『諷

雅号ぶっちゃけばなし(45)

ひょうた



村田 瓢太

三十一年会社の文化部に川柳部が開設されました。当時考えつかぬまま名前を反対にして平太と名乗っておりましたが、しばらくして雅号らしく瓢太と改めました。先生は川維本社から迎え、初代鮎美・次ぎは豆秋・三代目は好郎先生と代々よき師に恵まれております。三十八年十月すめられて始めて川維本社句会に出席しました。ところが「腹立つ日割箸さえも折れるなり」がはからずも天の天に抜かれ夢のような氣持でした。爾来月々出席しておりますが、生来の愚鈍、あまり香ばしい句はつくれません。

本職・社会保険士(五十四才)
副職・奇術学校長

詩」と暫定呼称することにした。「敗戦革命」により著者の世界観は大きく変化した「開眼」を得たと考え、内容において「抒情を揚棄して批判精神を主体とする」形式において「多角的表現」「一作品一形態主義」などを主眼に、生きているアカシをたてるために、「こころざしをのべる」ことを目的とするもので、単なる「詩」が目的ではないというのが要領である」と云っている。B5版三百八十四頁、定価千円。

明治百年東は風色に明け
兆の上の字がないデノミとまいろう
麻菜日本 徐福の墓は苔蒸して
戦後無帽 アクセサリーに赤い羽根
月へ月 地球はネズミあとをつぐ
資本主義末期花咲くロマンスグレイ
肥車ひくとも軍馬にはなるな
便乗の君子の好きなベレー帽
歌謡曲 豆腐の上を歩くよう
輪禍無限 このごろ鰯雲まれに
体裁内容ともに立派である。(橋高薫風)



▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

南大阪川柳会

金井文秋報

母親の口からめで度い日が洩れる
静けさについ付添いが寝てしまひ
強烈なおいでで野バラ見直され
絵のように薄の裾に咲く野菊
身のしまるシーズンオフの奥の院
夜の静寂隣のベルがよく聞こえ
子等やと寝た静けさに出るあくび
身振りして話すロビーのガラス越し
ネオンの灯消えて静けさとり戻し
金とヒマあってロビーに来た孤独
カラーテレビ買った決心に日がかる
終電車出てプラットの灯も消え
不具の子をいとおしむ母強く生き
母親の期待大ききのしかかり
人間の知恵が野生でほんととかず
先立つものがなく決心宙ぶらり
母らしゅう子にしてやれぬくらし
金持に見えるロビーで待ち合わせ
よそ行の言葉ロビーで逢う二人
ロビーにて行つといふと手を握る

滋 雀
吸 江
一 舟
静 馬
弓 彦
白 柳
好 郎
郎 郎
双 楽
富 久
形 水
柳 宏
綾 子
文 秋
古 方
恒 明
あ い
千 梢
小 松
誓 二

若者が野生に還るサイケ調
外科室の静けさかたず呑んで待つ
新郎をロビーの隅で激励し
孫婦りもとの静けさ取り戻す
ロビー出たとたん普通の声となる
見合いとは知らずロビーで声をかけ
神棚へだけ決心を告げて置き
静けさは時計の音も気にかかり
決心をして来た程でない都会

玉造川柳会(大阪府)

西出栄報

指圧師の効能太い指を見せ
どこまでも検事へ胸を張る汚職
賞品をつむ風呂敷持つてくる
おしほりに目覚めたところで飲み直し
おしほりが女はそとと汗押さえ
おしほりが出てもなしの行き届き
おしほりへ一番安いものをとり
新幹線さやが抜けない出張費
下宿屋の下がめし屋のひとり者
便利さに大事な娘やり遅れ
駅までの便利さこめてある家賃
連絡の便利下りたり上ったり
旅に便利傘も便利な折たたみ
複雑な行くを母はよろこばす
キッチンを便利に変えて嫁をとり
事件事件本部ばかりがふえてゆく
本部から視察にゆくという通知
血の通う処置を本部に叱られる
本部だけほくほくもの新宗教
動脈硬化本部ねつから持あかず
本部詰になって支部長縮こまり

肖 二
章 雅
弘 美
庸 佑
虎 水
智 城
喜 子
生 仙
榮 長
水 一
形 久
富 一
照 一
肖 二
肖 二
金 三
好 郎
仲 吾
一 舟
小 松
鬼 遊
伊 升
文 樹
宏 芳
竹 青
珠 笑
双 楽
大 庸
静 馬

世論に勝てず本部案をねり直す
何もかも知ってるだけの本部詰め
ラーメンで捜査本部は午前二時
軍手ひどう汚して日当握りしめ
落石に注意とパスに迫る崖
かど店へ又とびこんだダンパカ
造成地土が流れるままで売り
犠牲者を前に人災だ天災だ
ひどい奴やと借りてる方がふれ歩き
大國はひどい世論も受けつけず
地下足袋のひどい疲れを療やす酒
有り余る古米を値上げする政治
何時までも若い遺影に一寸妬け
面影を消すにしのびぬ住所録
遺墨集それぞれの人にそれぞれの字
引合いにいさされ故人も辛かろう
故人から借りてましたと律儀者
通夜の席いといとばかり語られる
いずも句会(出雲市) 尼緑之助報

町内の行事へ若い者居らず
試歩の杖運動神経まだ残り
一身同体妻も夫も神経痛
稲の出来残暑見舞に書き添える
町内に教育ママの旗がしる
七人の敵なき町内に住みなれる
裸から蓄めて裸で冥土行きの
温泉の情緒よろめく灯がとり
温泉へ田植終った主婦の会
親友と語り退屈せぬ夜汽車
曲り角力を貸せる友があり
裸同士添い俵せな家を建て
巡 歩

清 子
古 方
小 路
や な
章 雅
中 性
白 柳
あ い
井 平
弓 彦
六 竜
柳 志
頂 留
滋 雀
綾 子
柳 宏
誓 二
恒 明
晃 男
醉 歩
正 朗
大 鳥
紫 二
孤 呂
独 仙
明 朗
澄 水
祥 月
治 歩

残暑まで豊作型で米価もめ
幸運な男裸で身を起こし
後添いの若さ神経休みなし
夏ばてを鏡にしばし見る残暑
泣き声は残暑の中の二DK
悩み事親友根こそぎ聞いてくれ
金も名もないが信ずる友を持ち
温泉で端唄を一つ覚えて来
若い血が残暑にいどむ甲子園
アスファルト残暑へ大きく欠伸する
憎まれ役に親友押し出され
看護婦の私語神経に突き刺さり
宿題へママに残暑が尚きびし
親友の他人行儀を嫌う酒
盆踊り蚊帳の広さをなつかしみ
川柳ささやま句会 小島無聖報

三ナスピおぼろの夢に期待かけ
おしゃべりが欠伸しといてまだ続き
公聴会突如くずれた大あくび
恋仲はさかれてよけい盛り上り
赤子をよそに豊作の稲盛り上る
ああそうかと欠伸で相槌し
癩癩の欄干だコップ子が押え
豊作の倉庫の米もあくびする
一輪をコップに生けて情深む
晩酌のコップ持つ手に明日があり
かくれ場のない声がした丸裸
口答えした夜孤独にとじこもり
茄子の馬涙新たな盆迎え
いつまでも恋人で居ぬ口答え
口答え倍に聞える義理の仲
実世音

口答えだけが親子の対話なり
可愛らしい顔が思わぬ口答え
生あくびかんでころして飲み下し
えらいさんが去んだ扉へ欠伸する
熱弁ヘコップは前に置いたまま
客席の湧く潮時に種が切れる
もり上がるチャンス逃さず寄附の
平ばかり残ってムード盛り上り
貧弱な裸胃袋だけふくれ
見えそうで見せぬ魔性の肌が脱ぎ
川柳たましま句会 水粉千翁報

涼み台おとなりさんと話し合い
相棒は知らん顔して知っている
指切りを果す夜業の灯がきれい
聞きわけのよい指切りに泣かされる
一杯で気嫌直した歩きよう
一杯の涙かわいてから決意
氷柱の中に断ちたい迷いあり
指切りを忘れた顔にめぐり会い
先着という一列の世帯染み
相棒をかばえば罪が深くなる
グラビヤの秋を覗いてもう涼し
一杯はゲンコツで飲むコップ酒
指切りの丘春秋の雲を追ひ
独り旅部屋一杯をもて余し
小さい目に右一列を教えられ
指切りヘコスモスの花小さく揺れ
夕涼み心に汗をかく二人
やわらかいこの手の愛を信じよう
企みを胸に女のやわらかい
風鈴のわが世たれぞ常ならん

指切りもむなし心の人であり
人生は長し誤算の曲り角
タレントの誤算明日のない拍手
冷房へ財布の固い涼み客
指切りの指から濡れたある不信
一列を守ったばかり売り切れる
やわらかな言葉に負けだ黙否権
妥協した男一杯だけは飲み
指切りを果す財布の紐を解き
一列のしんがり何か考える
快調に進む仕事がもうお昼
どんぐり川柳会(大阪市) 川村好郎報

鰻でも食うかと居残りさせる肚
土用丑鰻の値段聞いただけ
刑務所を往復してる人生も
往復の右も左もビルが建ち
往復切符小さな安堵買う
往復なら安い市電がなつかしく

黄銅六角ボルトナット
及び特殊換物全般

合資会社
西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL 06 3452-114
夜間 06 4400-8

出張を愛児の声にはげまされ
居留宅にて妻に出させる電話口
義理だけの見舞は電話でこそまし
家からの電話と聞いて興がさめ
国鉄事故油断なしとは云わせな
いライバルへ油断しているように見せ
久し振りに交るに電話口
好郎 輝 楽 好郎

まるで川柳会
川村好郎報

以前ではこうも焼けないゴルフ焼け
裏表わからぬほどに焼けて秋
好きなのにいつも会うたび茶化す彼
食べてはそれから中毒気にかかり
コンテスト男の方から茶化す声
夏だけは日やけで通せる地の黒さ
日焼けせぬ子の整いすぎた顔
茶化す手も覚えホステスよう儲け
好郎 茂 兒 郎 好郎

あする川柳会(大阪市) 川村好郎報

この範囲迄は認める交際費
寝冷えしたらどうですかと妻
プランコを横どりされた子に夕陽
五寸釘どっち向いたかスツと抜け
飲み過ぎは云わず寝冷えだけを云い
ご飯もう食べてきました鯖の色
好郎 白 柳

感傷をのせて残暑の風が来る
学歴のない生え抜きの苦労談
やすらかな軒ベッドの下に寝て
逝ってからその足跡が評価され
はじめ無茶とわかっていてノルマ
入院をしてからベッド党になり
恵美子

青 香 弓 彦 素 郎 百 酒 ゆきを 恵美子

— 60 —

弁当へ妻の表情思ひ出し 万里歩
さりげなく笑つて理不尽うけ流し 峯園
表情で確かにOKだと悟り 泉水
表情はよいが心の裏表 内海
表情も変えぬ男の腹が出来 紅溪
腹は知れず表情だけは頂ける 快夢起
表情の明るさハワイの空に似て カロ女
表情はハッキリ敵意含んでる 魔花麗
無表情なれど重みは父のもの 曉舟

城北明朗句会

川口弘生報

引越しの最初の客は御用聞き 弘生
あきらめた指輪が出たよ引越しに 生弘
引越しに未知の世間に鬼は居ず 生水
引越へ派手に着換える妻の見栄 多幸
引越して実感となる一年目 奈良子
引越して行く先々で知る人情 久子
引越しの先遣部隊妻ときめ 一登
新築が出来て引越し待つ長さ 柳生
引越しに漬物桶が先に着き 行有
引越しをして税務署の眼を逃れ 進彦
酒屋が越して来保険料上り よし彦
頼母子をおとして引越しやと終え 茶々坊
日と共に古巣なつかし越したあと ハエ
大空に重なる花火の美しさ ムラエ
肉体美出せるだけ出してクシヤミ 繁子
いんうつな雨を楽しむ農夫なり キサノ
はこ虎の笹にぶらりと町を行く セツ
お巡りも一盃すぎて虎となり 聖川
物価高虎の子みる度やせている 富士
張子虎どれが雌やら雄なのか 芳
落ちぶれて応挙の虎もニセと知り 一乃字

川柳塔松江支部

岡崎祥月報

医師の眼が冴えて命の灯がともし 八百里
真夏でも肌を見せないみだしなみ 唾蟬
風鈴の鳴る音小さく夕涼み 光春
明日旅行秋の夜空に気にかかる 義久
七夕に横文字もあり笹ゆれる 山俄
のがれて島の夜空へ抱く孤独 青湖
咳一つ夜空に消してマスクする 彬
クーラーで真夏を越した白い肌 巡歩
引揚げる農夫に出合う夕涼み 舞吉
父母の授けし命墓碑洗う 大鳥
暗い暗い夜空が僕をおしつふし 鶴丸
人間の皮を脱ぎたい真夏の陽 晃男
わが家よりテレビの七夕美しい 天痴人
月と星鬼ごっこしている夜空 祥月
駒つなぎ 南柳報

便乗を上手くこなせぬ律義者 悟郎
どしや降りの雨に便乗一泊し みよ郎
便乗をさせて貰った神頼み 喜正
便乗の好きなお方で平社員 柳信
便乗の水洗便所あとになり 小路
便乗がとんだ所でボロを出し 祥恵
値上する風呂に便乗する理容 南柳
便乗の女連れから出る踊り 多津緒
便乗禁止ヒッチハイクが置き去られ 白柳
便乗に遅れ理髪は叩かれる 規一郎
便乗もようせず浮世をすねて生き 潔
便乗の芸者唄わすバスの旅 はやを
便乗に命をかけた自家用車 竜雲
便乗はゆるませんと米値上げ 育園
川柳たけはら(竹原市) 山内静水報

ママの絵をかいたと弟もってきた 洋子
かりた本いまだにかえさず私のもの 美恵子
先生が好きだから勉強が好き 紀美子
新校舎三階までを駆けあがる 浄美
犬にまで貞操を押しつけるなり 孚彦
雨蛙うまく道路を渡り切り 泉幸
トイレから口笛吹いて出て来たり 蘭
ネズミ取りゆうべのまでかわりなし 清遊子
働ける自信がついてヘルメット 鬼子
チャンスうまかついて男の廻り椅子 房昇子
おそろしき虚しさ蠅が卵生む 笑子
見くらべてなおあまりある母の手よ 延子
たしなめる程度とビールぐつとあけ 青居子
俺も孤独池のしじまを乱すまい 静水
ふんぎりのつかぬチャンスへまかせ 不動
散々にもましたあげく多数決 今日 貞路
今日は今日だが明日へも続いてる 一子
イメージをこわしたくない人と会い 貞子
明治百年おっつけ節の歩調なり 芳則
女なら三十盛りのバラの色 そのみ
値上とは別にぐんぐん子て育ち 朽
承知さす気になじく語りつくる 波
そこまで送るプロポーズのチャンス 史
いのちなき造花に眼をばくらまされ 静波
遠浅へ小いさく動く潮干狩 雅鳳
どしや降の池白鳥のあわれなる 清海
新店のそろそろなれてきて値上げ よし恵
人間缶詰厚きコンクリートの壁 政己
かすかなる期待へもろき砂の塔 康徳
健康にめぐまれ多弁に気づかざる 大のり
すくなめに入れパートへ行く財布 操子

付けが効く店で男の顔をする
内心は妻の推理に恐れいり
どうにでもなれの若さがいとしかり
我がもとに咲く満足なバラの色
池の水かえてくつるぐ衣更え
犬とりが来ている愛犬庭にいず
節約をせよと煙草の値上げ中
チャンス待つ顔はファイトを押さる
予定日へ安産だった児をのぞき
日曜はたのしいものよ菊を挿す
紫苑荘 凡女

ふじかけ短詩陸会(鳥取市)

礎山報

武家門に今はまぶしく灯く電気
門からも見える窓辺へピアノ据え
裏門を訪えば食卓見える庭
門外に立てば庭木の涼しそう
もう来ないつもり門をふりかえり
寮生が門を抜け出た背伸びする
門の外まで送られた佳い話
三年間くぐった門を振りかえり
女子寮が暮れ初め門の錠が鳴り
事故死とは知らずに犬が門で待ち
和宏
(ここまで小・中学生)
ダブダブの服で入学門くぐる
門構えだけを承知で嫁した愚痴
音もなく門をくぐった高級車
落選の門を冷たい風が抜け
俸せな妻の匂いが門を抜け
県庁に門がなくなり親しまれ
寺の門何度もうぐり浮ばれず
いにしえのおもかげ偲ぶ門構え
深呼吸させる城門海が見え
慎利子

美人ではないが名門出の魅力
名門と云われた豪家売り出され
何時の間かエリートらしい門構え
陽明門名工の腕生きつつけ
山門に響くが如く蟬しぐれ
名門をねらい浪人三年目勝
鉄鋌を打った門扉にある威圧
名門と云われ女系の続く家
名門の誇りにかけたホームラン
礎山 佳女

蘆川柳会鳥療句会

岡崎祥月報

レントゲンの影に決断迫る医師
末っ子の甘さ都会の灯が嗤う
子の寝顔見れば離婚に踏みきれず
末っ子の入学日です若く塗り
税金の使途は豪華なビル工事
雑音をさせて岩場で糸を垂れ
計画の外に末っ子生れてき
正しさを言う決断にある誇り
監督が居て保安帽よく動く
ビル工事働く人が蟻のよう
大物になる人相と見た易者
人相を見直すように面接日
雑音もなく酔っているシュベルト
結局は末っ子親を引受ける
父さんの白髪末っ子ふしぎがる
クライマックスのシーン雑音に
柳葉鶴丸氏退院祝賀句会(松江市)
岡崎祥月報
本番になったとたんにミスが出る
本番へ服役余ゆある煙草
水虫が指の間で秘密めき
光春

高級洋菓子

Pt's

堺市役所前 TEL(2)2334

幸運の便りベッドに波紋なげ
米価値上げ公約を狂わせる
水虫のちくちくちくちく式最中
好きですとなかなか云えぬ回り道
回り道汚れた街を見て通り
本番になっても酔がまださめず
知らぬが仏隣へ回る運
療養所の歩行訓練気まぐれの足
本番となり低調になる選挙
十月号5P下段十八行目を汚職日本分厚
い日本紳士録と訂正。
▼水粉千翁氏(倉敷同人)は十月十五日付を
もって倉レを定年退職、引きつづき山陽技術
振興会へ勤務された。
▼岩田美代さん(富田林同人)の新住所は大
阪府富田林市富美が丘十四十七。

第二十回 大阪文化祭川柳大会入賞者

席題「待つ」竹岡屯坊。「浮世絵」道田葉平。兼題「読書」前田ヒサエ。「新聞」丹波太路。「公会堂」西村左久良。「あいさつ」羽原静歩。「文楽」山川阿茶。詳細次号で発表。

★ 盲目の詩人・高鷲亜鈍著

句 座 下 白 黒 記

一冊 七百元（送料共）
名著「詩川柳考」の高鷲亜鈍氏の句集が出ました。題字は小生宛に来た手さぐりの便せんから抜いたもので句集「白黒記」と読んでいただきました。（一三夫）

二月号発表（12月15日締切）

川柳塔（10句） 中島 生々庵選
近作柳樽（10句） 西尾 葉選

課題吟（各題5句以内）

「迷信」 岡崎 祥月選
「犬」 山本 素郎選
「新車」 伊藤 茶仏選

★川柳塔の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

三月号発表（1月15日締切）

川柳塔（10句） 中島 生々庵選
近作柳樽（10句） 西尾 葉選

課題吟（各題5句以内）

「切手」 山本 立児選
「芽」 間島 青丹子選
「人情」 直原 七面山選

★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

本社忘年句会

日時 十二月六日（金）午後六時
会場 天性寺（てんしょうじ）
市電・市バス上本四丁目停前
（電話761・4868番）

兼題 柳話
「スケート」 清水 白柳
「外来語」 橘 高薫風選
「役人」 正 本水客選
「寝返り」 市場 没食子選
菊 沢 小松園選

★ 席題 三題（題と選者は当日発表）各題三句
費用 二百円
★ 投句だけの方は切手五十円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います

大阪市南区鰻谷仲之町20

川 柳 塔 社

電話大阪03 985 番

1月の兼題 「書きぞめ」 「星子」
「ゲスト」 「銚子」

定価 百四十円（送料六円）

半年分 八百七十円（送料共）

一年分 千六百八十円（送料負担）

昭和四十三年十一月二十五日印刷
昭和四十三年十二月一日発行

大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地
編集兼 中島 蓬太郎
印刷所 大陽印刷株式会社

郵便番号 五四二

発行所 川柳塔社
大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地

電話大阪・二七一・三九八五番
振替口座 大阪・三三三六八番



気品あふれる シルエット……

風格と折り目の正しきで、紳士服の使命を完全に表現、存分にオシャレを楽しめます。

その秘密は、東レテترون®—
敷しい動きにもシワ、型くずれ
知らず。いつでも気品あふれる
シルエットです。



東レ **テترون** (ポリエステル) 100%
オルテロン
スーツ・スラックス
TOTO 東洋レーヨン株式会社

・2DK・

★雑誌なんて仕事をしていると、まったく月日の経つのが早い。もったいないくらいだ。もっとゆっくりとした時間をもちたいが、こんな調子ではアツというまに一卷のおわりになってしまいうよう
で、いかにも「時」が惜しいような気がする。

★十二月号も月末発行のメドがたったのだ。改題いらい三年数カ月のうちただの一回だけ、印刷所の製本のやり直して月末発送ができなかった。

★本号も「秀句鑑賞」の梅志氏と、「大萬川柳」の好郎氏が病いにたおれたが、よく責任をまっとうしてくださった。

★皆さんが原稿の締切日を守ってくださいと、編集スタッフの協力が、月末発行の原動力には違いないが、小倉集平さんの迅速・正確も忘れてはいけないとおもう。

たのしさ ひろがる お買物



阪急

大阪梅田本店・神戸支店
東京大井町・数寄屋橋店

この人のいるかぎり、こんこの月末発行を公約してもいい。

★清水白柳氏に「本年の回顧」をゴムリねがった。

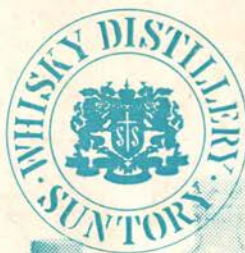
★ことをしも語味の市で同人特集のお茶をにごしたが、ある企画を中途でやめたから、こんなカタチになったのである。

★新年の句会案内が、毎年遅れるが、これは年賀ハガキを使うためである。念のために。

★よい正月をお迎えください。

☆ボクの関係にしている放送が、毎日朝の九時三十分からなので、ずうっと睡眠不足がつづいていて目下ヒルに仕事をして、ヨルは寝る練習中である。(不二田一三夫)

世界の通が憧れる……



国際銘柄

サントリ

■インベリアル・ローヤル・オールド・角瓶
カスターム・ゴールド・ホワイト・レッド

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十三年十一月二十五日 印刷
昭和四十三年十二月一日発行 (毎月一日発行)

川柳塔 十二月号

料理も電話も

551

ここがいちばん

TEL (641) 551-2

広東料理・焼餃子

豚饅 蓬萊 焼売

大阪なんば

◆出張販売店◆

なんば高島屋／心齋橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
堂島地下センター・弁天阜頭支店／中之島サン・ストアー

定価 百四十円 (資料六四)